

物を用ゐ、其の中央に位置すると共に、早くも汽艇は舷側をはなれてしまひます。

かう云ふ様に、乗艇の場合には目上の人、一ばん後に乗り込みますが、今度汽艇が陸岸の棧橋に著いた時には前と反對に、艦長がまづ先に上陸し、位置の低い人が後に上陸することゝなつて居ます。

又軍艦の艦橋には、いつでも、天皇陛下がおいでになることに、ちやんと定めてありますから、如何なる階級の人でも、艦橋へ上る時には、恭しく挙手の敬礼をしなければなりません。

艦の艦尾の方は、前部に較べて一層神聖なものとしてあります。艦長の室も、司令官の室も、又司令長官の室も、いづれも艦の方にあります。殊に其所には、天皇陛下の御眞影も掲げてあります。艦尾の階段は、艦長以上でなければ上り下することが出来ません。

軍艦では、艦長室、士官室の外は、喫煙をゆるしません。上甲板の後部には、

天皇陛下

艦尾

喫煙所

士官室士官と士官次室士官のために、喫煙所が時々設けられます。夫れも大抵十五分位のもので、教練などの済んだ後に立ちながら風に吹かれて喫煙します。

四 軍艦の風取

軍艦の晝や寫眞を見ますと、その上甲板に煙管の雁首のやうなものが、澤山つたつて居ます、あれは一體何でせう。

あの雁首の如きものは、ベンチレーターと申しまして、新鮮な空気を收めて、夫れを下甲板の方へ送るためのものです。

軍艦は丁度鐵で造つた函のやうなもので、上甲板に居るものは、四方共に吹さらしですから、海の新しい、まじり氣のない、體のためになる空気を呼吸することが出来ますが、下甲板や、夫れから、もつと下の方で、働いてゐるものは、いつも濁つた空氣の中で、體に大毒な瓦斯を呼吸しなければなりません。殊に機關兵などは、冬でも百度近くの熱の中の薄暗い所で、衣服も炭の粉や、

ベンチレーター

機關兵

★軍艦の風取

頭痛

油のために、きたなく穢れたのを著て、機關の運轉を司り、釜の火を焚かねばならぬのです。

魚類でも泥水の中に居ますと、苦しくなるものか、間もなく浮び出しますが、まして人間ですもの、かう云ふ所に働きづめで居ると、忽ち頭痛を起したり、其の他の恐しい病氣を起すでせう。

けれども軍艦を動かすのには、かう云ふ熱い所、薄暗い所、苦しい所、穢ない所で、一所懸命に活動する者が居なかつたら駄目です。しかもかう云ふ人に元氣をつけてやるのは新鮮な空氣です、上甲板に多くのベンチレーターの見ゆるのも、亦其のためで御座います。

所が今の新式の軍艦には、一寸見た所で、ベンチレーターの類が少く、中には殆ど見當らないのもある様ですが、之は何故かと申すのに、實際ベンチレーターはいざ戦争といふ場合に、よく砲彈が當るのですから、軍艦としては、なるべく之を少くする工夫をしなければなりません。

新鮮な空氣

靖國神社

皆さんの中には靖國神社に、御詣りになつた方が澤山ありませう。あの遊就館の陳列品のうちに、軍艦日進のベンチレーターがあります、見るも物凄きまでに、敵砲彈の破片を受けて居ります。

此の日進のベンチレーターの穴は、明治三十七年八月十日の、黄海の戦に蒙つたもので、此の戦争は、旅順口の敵艦隊が、悉く浦鹽斯德に行かうとして、港を出て、こゝに我が東郷大將の聯合艦隊と戦ひを交へたので、巡洋艦日進は、丁度此の時敵艦と云つて、一ばん後に居ましたから、最も多くの敵彈を蒙り、死者も他の艦に比して、著しく多かつたのですが、就中此のベンチレーターは蜂の巢の如くに打破られたのであります。

かう云ふ様に、ベンチレーターは平生でも、戦争の時でも、まことに大切なものではあります、あまりに大き過ぎて、よく砲彈の的になりますから、なるべく之を小さくして、しかも自由に通風の目的を達する様にしたならば、一層都合がよいと云ふので、近頃出来る艦には、以前の如く雁首形ではなく、別の形を

★軍艦の風取

殿艦

通風

したものが多くありますから、夫れで寫真などにも、これまでの如き形をしたベンチレーターが見えなくなつたのであります。

水兵でも士官でも、夜寝る所は中甲板か下甲板かでありますが、殊に下甲板は、最も通風が悪く、自然の通氣にまかせて置かうものなら、逆も寝ることが出来ません。

冬の寒い頃はまだしも、夏などは蒸し暑くて、寝苦しいばかりでなく、悪い瓦斯のために體を痛めますから、どうしてもベンチレーターの送つて来る風ばかりでは、凌ぐことが出来ませんので、風車などを廻轉させて、強て風を起させます。

尤もあまり強く風を起すと、いくら暑い時でも風邪をひく恐れがありますので、適度に行はねばなりません。何分軍艦と云ふものは、戦争をする様に出來て居て、旅客をのせる汽船などは、大きに趣きが違ひ、萬事不都合のことが多いのですが、之は又止むを得ない譯であります。

風車

萬事不都合

皆さん、日本の海軍々人は、かう云ふ苦しい所ではげしい勤務に服して居ります。夫れを思ふと皆さんも、寒い暑いのと云はないで、一所懸命に勉強しなければなりません。

五 探海燈の話

探海燈と云ふのは、遠方の海上を照らすために造られた、大きなアーク燈の一種でありまして、軍艦に備へつけてあるのは、五萬燭光と云ふ様な、恐しく強い度の光を放つものがあります。

アーク燈

探海燈とも、サーチライトとも申しますが、何れも一つの軍艦に、五つも六つも備へて居て、時々點火する事となつて居ります。

日本の軍艦では、毎水曜日の午後六時頃に約半時間づゝ、港の内に碇泊して居て、方々で同時に點火する時の光景は、なか／＼見物であります。

過ぐる日露の戦争の時、旅順口へ向つた我が海軍は、敵の探海燈のために、時

水曜日に點火

★探海燈の話

時ひといい目に逢はされたと云ふことで、何しろ強い光を放つて、蟻一匹も見逃さぬと云ふ有様ですから、日本の海軍が、どんなに強くても、此の光を避けて、敵の艦に近づくと云ふことは、どうしても神様でない限りは、出来ない仕事であります。

敵の方では又、何時どこから、日本の軍艦や水雷艇が、氣づかぬ間に押しよせて来るかも知れませんが、日が暮れたが最後、のべつまくなしに、グル／＼廻る探海燈の大きなのを點火して、夜ツピて休みなしに用心して居るのですもの、どうして逆も、逆も其の光の中へ入ることは出来ないのです。

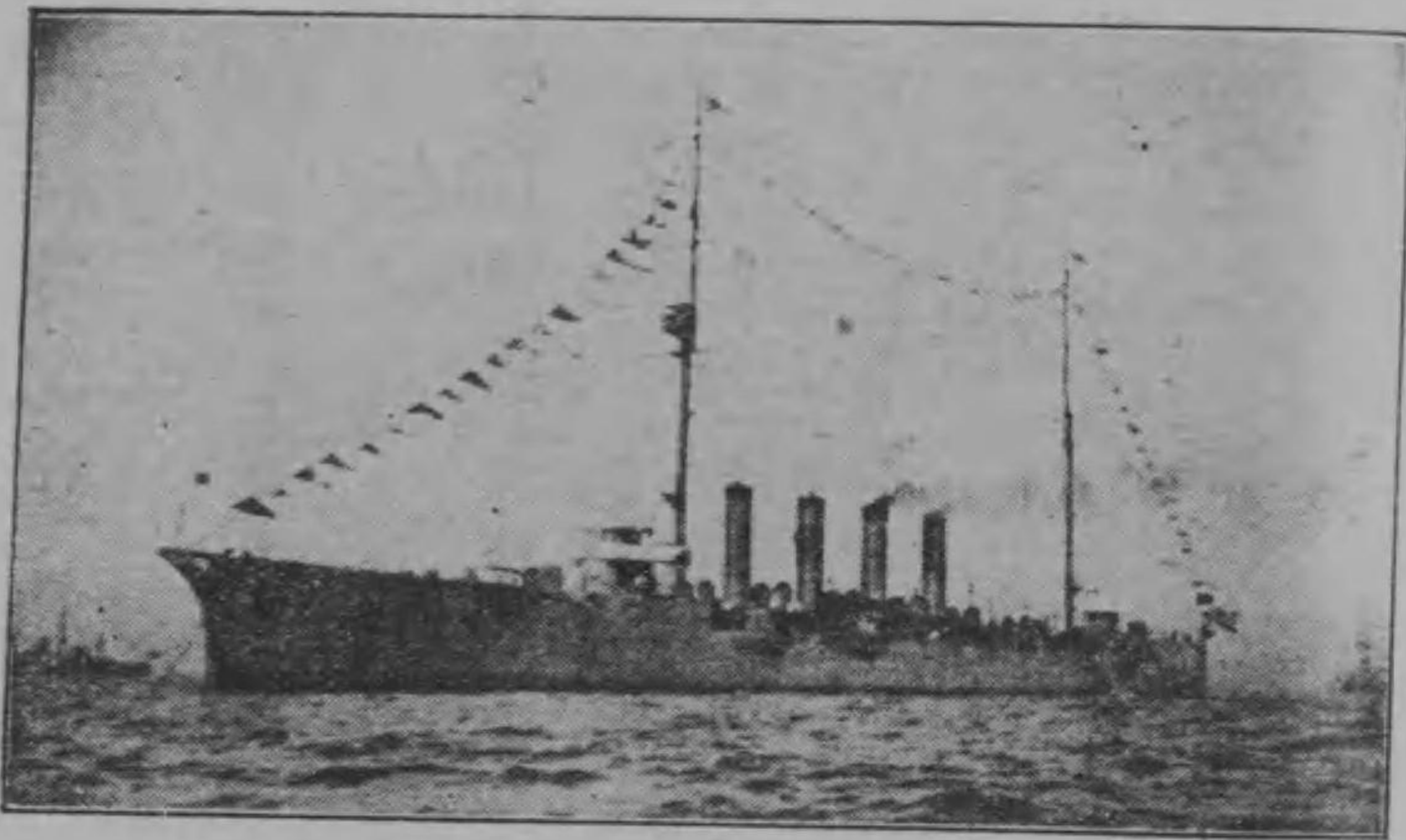
みなさんは、日中仰いで、太陽の光を見ることが出来ますか、あの強いく／＼太陽の光線には、たゞ一寸見上げただけでもう眩しくつて、堪つたものでは御座いません。

探海燈の火は、丁度太陽の光線の様なものですから、之に向つて進むことは逆も出来ない相談であります。

太陽光線

佐世保

後部艦橋



(戸平 艦洋巡)

私が去年佐世保へ参りました時に、非常の大雪が降りましたが、丁度其の夜は、例の水曜日の晩でしたから、港内に碇泊して居る、十數艘の軍艦が、一定の時刻になると、一時に探海燈の點火を致しました。

常の夜ならば、随分長い光が、彼方からも、此方からも私共の眼を射つて、眩しいのですが、雪のために、光線が遮ぎられて、目的の所まで達しませんでした。

丁度此の時私は、雪の中で、外套も著ないで、軍艦淺間の後部艦橋に上つて見ました。何と云ふ美しい景色でせう、私はこんな見事な景色をついぞ之まで、一度も見ることがございません、丸で極樂の花

ふる世界に立つて居る様で、寒いと言ふやうな感じは、更に起らず定時に探海燈が消え失せてしまふまで、私は可なり長い間、立ち續けて、其の美しい景色を見守りました。

浅間の後部艦橋にある一臺の探海燈は、私のツイ目の前から、其の鋭い光力を放つて居ります。雪が降りしきるために、光は遠方へ達しませんが、しかし其の光の道に當る所は、降る雪の一つ／＼を、明かに見ることが出来、殊にその色さへ、金色に輝いて、いくらよく見直して見ても、どうしても雪ではないやうに思はれました。

眞暗い空中から、ドン／＼降つて居る雪が光に當ると共に、金色に輝き夫れからまた暗に消えて行く有様、私は此の美しい光景に、言ふべき言葉もなくて、いつ迄も／＼見て居りましたから、探海燈が消え失せてしまつた頃には、雪のために私の洋服は、全く白くなつてしまひました。

金色の雪

六 軍艦の洗面所

大尉以上

海軍將校のうちでも、中尉と大尉とでは、何かにつけて、大きに違つた所があります。夫れは大尉以上になりますと、軍艦に乗つて居るときも、士官室士官と云ひますが、中尉や少尉では、士官次室士官と呼ぶので、次の字が一つ餘計につきます。

中少尉の士官は、士官次室と云ふあまり廣くもない室にゴタ／＼に一所になつて居りますが、大尉以上になりますと、一つ宛の自分の室が貰へますので、何かに都合がよろしい。

私室と公室

で此の自分の室をば、私室と云ひまして、御飯を食べたり、會議をしたりする、廣い立派な室をば、公室と云ひます。所で大尉以上の將校は朝起きて、私室で顔を洗ふことが出来ますが、次室の中尉や少尉は、きまつた洗面所へ行かねばなりません。そこで今度は、洗面所のお話しを致しませう。

★軍艦の洗面所

使用の水量

浅間の洗面所は丁度私達の寢室の直ぐ隣りにありますから、例のハンモックから飛び下りると、寢衣のまゝで先づ洗面所へ走るのです。洗面所は旅宿のやうに、三つも四つもの金盥が備へつけて御座いますが、使ふ水の量は、ちやんと一定してありますから、少し不注意にしゃうものなら、もう自分の分がなくなつてしまひます。

一體軍艦では、水が大切のもので、長い航海を致しますと、はじめに港で積んだ水が、無くなつてしまひますから、其の上は海の水を器械にかけて、淡水にして飲むと云ふ有様で、水を上手に使ふことが一ばん肝要であります。

私はいつも此の洗面所で、グラ／＼と酔ふのでした。なせかと申しますのに、誰でも朝起きた時は、あまり心地のよいものではありませんのに、こゝは艦の中でも、下甲板と申しまして、上から三段目の底の方で、空気もよく通りません。殊に近所には、米俵や味噌樽などが、澤山積んであつて、いやな臭ひがブン／＼致しますから、只さへ胸がむか／＼して、頭が重いのに、艦體が右に左にはげし

電車のつり

く動きますと、第一體を定めることさへ出来ないのです。

皆さんは電車に乗つて、満員の時に、つり革に止らないで、平氣で立つてゐることが出来ますか、そのとき電車が、まがり角に来たとか、又は急に止つたりしますと、つり革に止つて居る人でさへ、よろ／＼として倒れさうになりますもの、夫れを持たずに立つて居ようものなら、思はぬ怪我をしないとも限りません。まい。

所が海の荒る日の軍艦はなかく、電車どころの騒ぎでなくて、大きくゆれますから、何とも例へやうのない、不愉快を感じて、胸先が悪くなります。さう云ふ譯で、私はいつも洗面所で心地を悪くするのでした。

碇泊中

碇泊中に起きた時は、楽しんで洗面所へ行くことが出来ますが、航海中、殊に艦の烈しく動く時などは、洗面所へ行くことが、いやでいやで堪りません。

けれども朝起きて顔を洗はなかつたり齒を磨かないでは、一日中心地の悪いものですから、無理に行つて、苦しい胸を押へ、足をふんばり乍ら、やつと朝の仕

★軍艦の洗面所

何所を風が吹くか

事をすますのです。私と一所に洗面所へ来て居る中尉や少尉は、私の弱つて居る時にも拘らず、何所を風が吹くかと云ふ様な平氣な顔をして、おめかしをすると云ふ有様。

そこで私は考へました。どんなに苦しいことでも、又どんなにやり難い仕事でも、なれてしまへば夫れ程でもなく、却つて愉快に出来ると思ひ、夫れからは成るべく艦の中の苦しい事になれる様にしたいと、かう心の中に定めて、其の後は可なり波の高い日にも、上甲板に出て、足の調子を取り乍ら、彼方此方を歩いて見ましたが、さう云ふことを幾度も繰返して居るうちに、次第に艦に馴れ、海にも馴れてしまつて、洗面所へ行くにも、さまでの苦しさを覺えなくなりました。

七 水兵の浴場

一日中働いて、夕方にお湯に入るのは、如何にも愉快なもので、そのために

疲れを休めることが出来ません。軍艦の中にもお湯が毎晩たります。けれども其の湯は淡水でないだけに、何だか物足らぬ感じが致します。

西洋風の浴場

軍艦の浴室は、艦長の、士官の、士官次室員の、機関官のといろく／＼に別れて居ます。場所は下甲板のうす暗い所で、浴場には西洋風の金盥が置いてあつて、中には波々と潮湯が沸いてゐます。夫れで熱ければ水を通し、温ければ蒸氣を通し、熱くすることゝなつて居るので、全體軍艦では炭火を使用することが禁じてあつて、何事でも蒸氣を用ゐます。御飯を炊くにも、お汁をつくるにも、一切萬事みんな蒸氣を使つて居ます。

バス當番

さて之等の浴場は、毎日午後六時から入ることが出来るので、バス當番と云ふ一人のボーイがついて居て、湯の加減をしたり、背中を流してくれたり、何かと世話をしてくれます。バスとは浴場のことです。

所が水兵のなかには、毎晩湯を立てると云ふ事が出来ないもので、夫れは又なせかと申しますと、何しろ一つの艦の中に、八百人も千人も乗組員がありますか

★水兵の浴場

下士卒集會所

ら、第一浴場を設ける場所もなく、又忙がしい作業が引きりなしに行はれますから、ゆつくり入浴して居ることも出来ないからです。

軍港などに碇泊して居るときには、上陸した場合に、先づ下士卒集會所へ行つてそこで淡水のお湯へ入ることも出来ませんが、長い航海になりますとさう云ふ機會もありません。さうかと云つて、いつまでも垢のついた體をして居ることも辛抱が出来ませんので、時々水兵のお湯がたちます。

所が前にも申しました通り、それ程大勢の者が一度に入浴をすまさうとするには、餘程大きな廣い湯槽を整へなければなりません、勿論そんな物は、第一艦内に置くべき場所もない有様、さて水兵は、どこでどうして入浴をするのでせうか。

水兵の用ゆる浴槽は、常にはちやんと一定の場所にしまつてあるので、いざ使ふと云ふ時に、取り出して來るのです。即ち浴槽は、一種の丈夫な布で拵へた桶の如きものです。

水兵の浴槽

泡シヤボンの

バスよろし

入浴のゆるされた日には、水兵はこのあやしげな浴槽を、上甲板の中央部に組み立て、ポンプで以て、ドン／＼海の水を汲み上げます。すると間もなく浴槽に水が一ぱいになりますから、更に蒸氣を通しますと、ものゝ三分とは經たないうちに、もう沸きますので一令の下にみんな喜んで、ドブン／＼と入ります。

ですから暫くの間は、上甲板がお湯の流し水や、シヤボンの泡の類で、一ぱいになります、さすがは軍人で、入浴をすましてしまへば、きちんと片づけて、水一滴もたらさず、何の跡も残らぬやうに、きれいさつぱりと掃除を致します。

士官室のお湯や、士官次室のお湯には、私も何度も入つて見ました。室に居りますと、バス當番のボーイがやつて來て、

『バスよろし』

と報告しますから、浴場に行きます。尤も狭い場所なので、せい／＼二人しか入れません。殊に浴槽は一人で思ふまゝに體を伸した方が樂ですから、一方が入つて居る時は、他の一人は外へ出て、體を流し、交る／＼身を横へて、十分に温



(將 校 休 憩)

は、洋服を着て居たのが、やつと日本服に著替へて、草履ばきと云ふ、都合のよ

まるのです。
所が湯は強い鹽分を含んで居るので、どうしても石鹼を用ゐることが出来ません。いくら垢を落さうとしても、皮膚にくつゝいて、只つるゝとすべるばかりで、淡水の湯で洗ふ様に参りません。
さてお湯から出ますと、例のバス當番が服をたゝんで置いて呉れますから、今度はゆつたりした日本服を着て、元の室へ歸り、一杯の茶を飲みますのに、其の味のよさは又格別で御座います。
何しろ朝起きてから、此の湯へ入るまで

一杯の茶

い體になつたので、何だか一日の仕事を終つて、自分の家へ歸つた様に、氣がのびく致します。

かうして皆の人達と、十時過ぎまでいろいろの話をして、夫れから床の中へ入るのですが、十一時になりますと、艦内の電燈が一時に消されてしまひますから、大層淋しく且つ薄暗くて心細くなります。凡て軍艦内の生活はかうして正しい時間を守られて居るのですから、始めは窮屈に思ひますが、馴れるとまことに心持のよいものであります。

八 救命艇の話

軍艦の左と右とに、一艘づつのボートが高く吊してあります。なみのボートや汽船などは、ボートデッキと云ふ、定つた所に、ちやんと置いてありますが、此の二艘のボートは、何のために、かう云ふ高い所にしかも割合に外側の方にむけて吊してあるのでせうか。

二艘のボート

★救命艇の話

助け舟

此のボートは、救命艇と申しまして、人が海の中へ落ちた時に、助けに行くためのもので、これが本當の助け舟でありませう。

軍艦の進行中に、よく人が海中に落ちることがあります。いくら海になれた水兵でも、危い場所で仕事をして居ると、つい足をふみ迂らせて、ドブーンと陥つたが最後、艦はさつさと進んでしまひますから、夫れこそ取りつく島もない有様。

しかも人の命は大切なもの、どんなことをしても、海の中へ落ちた人を救ひ出さねばなりません。救命艇はさう云ふ場合に、直に漕ぎ出して行つて、溺れた水兵を助けるのです。

尤も人が落ちたとなると、艦尾の方にあるライフブイと云ふ浮袋が、矢の如くに落れますから、溺れた者は、其のライフブイに取りつきさへすれば、もう大丈夫、間もなく助け舟がやつて來ます。

此のライフブイの中には、一種ふしぎな薬が入れてありますから、水の中へ入ると、はげしい煙をたてて、丁度海の中に噴火山でも起つた様に見えます。いくら波の高い時でも、此のライフブイまで泳ぎつくことは、夫れほど苦しいことでもありません。

一方艦の方では、豫め此の救命艇に乗り込む人員が定つて居ますから、中尉又は少尉の指揮の下に、忽ち其の人が乗り込んで、見る見るうちに、救助に向ひます。

何しろ人が落ちる様な場合ですから、海も相應に荒れて居ます。其の中を救命艇は、腕の骨も折れるかと思はれるばかりに、力の續く限り漕ぎ出して、またたく間に、その溺れて居る水兵を救ひ上げて連れ歸るのであります。

九 船に弱い人

日本の國は、四方共に海ですから、外の國に行かうとするには、船にのつて、海の上を渡らなければなりません。ですから日本人は、みんな海に恐れず、船

★船に弱い人

救命艇員

浮袋

によつたりなんぞする者は、先づ少い方ですが、それでも中には、船に乗ると心地が悪くなつたり、少し波が高くなつて、船がゆれ出すと、青くなつて自分の部屋へ入つたまゝ、ウン／＼云つて苦しむ人もある様です。

けれども皆さんは、そんな弱蟲では御座いますまい。

軍艦などでは、船に弱い人のことは、スウインギングブームだと云つて笑つて居ます。スウインギングブーム大層むづかしい名です。一度や二度聞いたゞけでは、一寸覚え難い名ですが、さてこれは何のこととせうか。

皆さんは軍艦が港にかゝつて居るのを御覧になつたことが御座いませう。皆さんは其の時に、船の横腹から、太くて長い鐵の棒が、右の方にも、又左の方にも、スツと、突き出されて、夫れから下つて居る、妙な鐵の綱で小蒸汽船が吊されてあつたのを、屹度御覧になつたであらうと思ひます。

一體此の小蒸汽は、軍艦から陸へ用達に行く人のために、下してあるのです。用のない時や夜のうちは、かうして吊して置かねばなりません。で若しも其のま

船の横腹

まに、打放つて置かうものなら、或は波にさらはれたり、又は軍艦にぶつつかつたりして破損する恐れがありますから、夫れでこんな棒や綱があるのでございませう。所が此の棒は、船の進行して居る間は、何の用もありませんから引込んでありますので、船に弱い人を、スウインギングブームだと云ふのも全く此のためであります。

航海中に、大へん波が荒くなつて、小さくなつて、弱つて居た人が、港へつくると、一番早く上甲板へ出て来るのは、丁度此の棒が突き出されるのと、同じ様では御座いませんか。

けれども皆さんは、海國男兒ですから船に乗つて、海の真中へ出た所が、決してお酔ひになる様なことは御座いますまい。あの人はスウインギングブームだなどと云はれたら、誰れでもよい氣は致しますまい。

こゝに又此の棒から垂らしてある綱のことを、ジャコブスラダーと云ひます。ジャコブと云ふのは、イエスキリストと云ふ、名高い人のお弟子ですが、何で

も繩梯子のやうなものを傳はつて、天へ上つたのださうで、其の縁起でかう云ふ名が残つて居ると云ふことです。

英吉利

世界の中で、一ばん海軍の進んで居るのは、云ふまでもなく、世界中で、日本が一ばん仲よくして居る英吉利ですが、此の英吉利と云ふ國は、むかしからの習慣をなるべく其の儘に残して置くといふ國柄だけに、軍艦のやうな、進歩のほげしいものにも、名前などは昔のまゝのを使つて居ます。

掌帆長

例へば只今申したジャコブスラーでもさうですし、又職名の中にも、掌帆長などと云つて、重に帆を掌る役目があります。けれども實際只今の船には、帆と云ふものが御座いませんから、随つて掌帆長は、ポートなどに關係した仕事をして居るさうです。

10 海上の屑拾ひ

私が軍艦にのつて、方々廻つて、歩くうちには、いろ／＼の珍しい事が御座い

支那の屑拾ひ

ましたが、旅順口の沖で、支那人の屑拾ひを見た時には全く驚くの外ありませんでした。

旅順口の沖と云へば、至つて波の荒い所で、風のない日にでも、小さい舟では随分烈しく揉まれます。私の乗つた軍艦は、一萬噸もあるやうな、大きな軍艦なので、今では港の口も、大層せまくなつて居りますから、港内へ入ることが出来ません。

それで沖の方の、丁度黄金山の砲臺の近くに、錨を入れてそこから小蒸汽や水雷艇で、旅順口へ行つたり、來たりするのでありました。

軍艦が此處へ著きましたのは、朝の八時頃のことでしたが、それは寒い／＼一月の末のことで、甲板の上に立つて居ると、身を切られるやうな、寒い風が吹いて居まして、波も亦なか／＼高いので、私共も成る程旅順口は寒い所だと思ひました。

すると此の高い波を凌いで、一艘の小さな舟がやつて參りました。何だらうと

寒いのを我慢して、甲板の上で見て居ますと、夫れは支那人の乞食が乗つて居るのです。

舟には霜が眞白に結んで居ります。支那人の親子は、一所懸命に、波と戦つて、やうやうのことで、軍艦の側まで漕いで來ました。

此の乞食は、日本の乞食よりも、きたならしいなりをして居ます。大人の方は誰れが見ても男ですが、二人の子供は男か女か、どうしても解らない顔をして居ました。

乞食の親子

乞食の親と、大きい方の子供とは、舟を漕いで居りますが、小さい方は、まだやつと八つか九つ位ですから、じつと大人しく坐つて居ります。

一體此の乞食は何しに來たのでせう。私には、はじめどうしても、其の譯が解りませんでした。

さて三人の乞食は、舷側の下の方の、穴のある所へ、舟を漕ぎよせて、待つて居ました。すると其の穴から、大根の切端やら、パンの破片やら、味噌汁の身の

様なものが、ドン／＼流れ出しました。それを見ると此の乞食は急いで舟の中から攪網を出して、みんな掬ひ取つてしまふのです。

今まで舟の中に、大人しくして居た小さい方の子供も、同じ様に、小さい攪網を持つて水の上に浮いてる物を、一つ／＼拾ひ取りました。

そして三人の者は、直ぐに食べられる様なものは、其の場でムシヤ／＼食べましたし、薬屑や、アンペラの類は、一々始末をして、持歸つて行きました。なんと云ふ哀れな乞食でせう。

日本の港には、どこへ行つても、こんな哀れな乞食は、たゞの一人も居りません。支那にはもつと／＼可哀想な乞食が澤山居ります。糲穀ばかり食つて、人に見せてる乞食も居るし、頭を石にぶつけて、血をだら／＼流したりしてるのもありました。見るからに氣味の悪い乞食が、支那の町にはウヨ／＼して居るのです。

夫れと云ふのも、支那人は遊んで居て食はうとするなまけものですから、日本ならば、豚も食はないやうな、粗末のものでも、支那人の乞食は平氣でムシヤム

なまけもの

シヤ食ふのです。

それにしても舟に乗つて食物や屑物を拾ひに来て、其の場で平氣で平げるとは、如何にも不思議な乞食ではありませんか。

二 軍艦の種類

軍艦は、戦争のある場合に、まづ先に進んで行つて、敵國の軍港を衝いたり、敵艦を砲撃したり、或は敵の港を封鎖したりして、陸軍を援けて、兵隊を上陸させます。

けれども平時には、國內の港灣を巡航したり、外國に出かけて行つて、居留民を保護したりします。されば軍艦の多い國は、外の國からも尊敬されますが、其の數も少く、小さな弱い艦ばかり有つて居る國は、兎角馬鹿にされ易いのです。

日本には大きな、しかも強い軍艦が澤山あります。其の中でも近頃出来た金剛だの、比叡だのは、十四吋と云ふ大きな大砲を、前後に八門積んで居る上に、噸

平時の軍艦

巡洋戦艦

數も二萬七千に餘り、其の上に足も速い、どこから見ても、申し分のない立派な艦で、かう云ふのを超弩級の巡洋戦艦と云つて、世界中を見廻した所で、英國や獨逸の外には、先づないのです。

英國にはドレッドノートと云ふ戦艦があります。今より數年前に出来たのでありますが、此の艦の構造は、之までの戦艦にくらべて、大きい大砲を、澤山積んで居ますから、普通の戦艦二隻にも當る力があるのです。

此のドレッドノートが出来てから、世界各國が争つて、夫れに似たものを作りはじめました。日本の攝津や河内なども、矢張りドレッドノート型であります。

此の頃の新聞に、よく『弩級艦』と云ふ文字が見えます、それは即ちドレッドノート級の軍艦と云ふ意味で、先づ軍艦としては、よい立派なものであります。

所が日本の金剛や比叡は、其のドレッドノートよりも、今一層大きい、今一層立派な大砲を有つて居ますから、夫れで『超弩級』と云ふので、ドレッドノートの上を越す軍艦と見ればよろしい。

弩級艦



(二一〇)

又夫れ等の軍艦は、戦闘艦と同じ武力があつて、そして巡洋艦と同じ速力を出すことが出来ますから、巡洋艦と呼ばれて居ます。いくら立派な大きな艦でも、足が遅かつたら、廣い海の上で、思ふ様に働くことが出来ません。之から後の戦争には、かう云ふ新しい形の軍艦が、是非必要であるのです。

三 軍艦の日曜日

日曜日と云へば、會社でも學校でも官廳でも、大抵終日業を休むこととなつて居る。日曜日でも随分忙しいのです。

試みに軍艦日課表の中で日曜日の部分を左に記して見ませう。

夏季

午前四時十五分

同五時四十五分

甲板掛將校、掌帆長屬、先任衛兵伍長、釣床掛起床。

午前五時

同六時

総員を起し、釣床を收め、上甲板を洗ひ或は掃除す。但し事業の都合により、夏季は五時三十分、冬季は六時三十分総員を起すも妨げなし。

午前六時十五分

同七時

士官衛兵釣床收む、朝食用意、續て朝食、(分隊點檢若くは、人員調査を行はざりしときは軍服に著替。)

午前六時四十五分

同七時三十分

診察。

午前七時

同七時四十分

★軍艦の日曜日

中下甲板を掃除し、金物手入れ、武器手入れ、終つて索具を飾る。但し水雷部員は、『金物磨け。』の令にて水雷を掃除し、『武器手入れ。』の令にて水雷發射管及び探照燈の手入れをなす。

午前八時 同八時

軍艦旗を掲ぐ、時辰を合す。

午前八時 同八時三十分

総員通常禮服に著替、(分隊點檢。人員調査の時のみ。艦内點檢を行ふ時は、此の時、『艦内點檢用意。』

午前八時四十五分 同九時四十五分

艦内點檢の時は、必要なる人員の外、總員を上甲板に出し、分隊長點檢。

午前九時 同九時三十分

甲板掃除。

午前九時十五分 同九時四十五分

分隊點檢、(若しくは其の他週課表中記載の事項。)終つて總員軍服に著替。

午前十一時三十分 同上

甲板掃除。

午前十一時四十五分 同上

午食用意、續いて午食。

午後一時十五分 同上

甲板掃除。

午後四時 同三時三十分

甲板掃除。

午後四時四十五分 同三時四十五分

夕食用意、續いて夕食、夜服に著替、(夏季夏服装着用中は服装内規による。)

午後五時 同四時三十分

甲板掃除。

午後五時十五分

同四時四十五分

軍事點檢、終つて短艇を上ぐ。夏期は時宜により水泳。

日没

日没

軍艦旗を下す。

日没後五分

日没後五分

士官衛兵釣床を下し、續いて總員釣床を下す。

午後八時

同七時三十分

甲板掃除。同時迄に總員就寢。

午後八時十五分

同七時四十五分

巡檢用意。

午後八時三十分

同八時

副長 巡檢、(巡檢後夏期十時三十分まで上甲板にて納涼を許す。)

午後十一時

同上

日課

公私室消燈。

以上述べたのは軍艦が碇泊中に於ける日曜日の日課であります。航海中の日課になると、其の内容には餘程違つた點があります。たまく港に碇泊して居る軍艦を陸地から見ると、艦内に居る士官や水兵達は何をして居るかと思ふ程、極く静かでありませんが、一度艦内に這入つて見ると、前に記した日課の外に、週課表の中に記してある種々な仕事をせねばならぬのです。

日本軍艦の特色

何時如何な場合に、軍艦の拜觀に行つても、艦内のキチンと整頓して、塵一つ落ちて居らぬのは、日本軍艦の特色であります。勿論日本人の綺麗好きからきたことかも知れないが、日曜日の様な休日ですら、朝から晩までに七度も掃除をするのですから、塵も芥もあらう筈がありません。

軍艦には甲板掛將校と云ふのがあつて、士官次室の若い少中尉が夫れに任せられるので、上甲板士官と、中甲板士官との區別があります。此の役目は非常に忙しくて、又其の責任も重いので、つまり甲板を整頓する事を本職として居ま

す。ですから次室へ来て、少しく體を休ませて居る間も、兵曹などがやつて来て、『上甲板士官』『中甲板士官』と呼んで、物品の移動から掃除の次第まで一々世話を焼かせるのであります。

大掃除

併し流石に日曜日の艦内には、のんびりした點があります。前日の土曜日には、艦内一般に大掃除がありますので、中甲板の様に、リノリウムを張りつめた所でも、土曜日の大掃除の時には石鹼磨と云つて、石鹼の液汁で綺麗さつぱりと拭ふのですから、靴のまゝで歩くのは勿體ない位であります。

さて日曜日には、士官次室の机、卓子の類にも、みんな海老茶色の被布をかけて、蓄音機をかけたたり、平常は仕舞つてある基盤を持ち出して、どん／＼鳥鷲を戦はせると云ふ有様、何所かにのんびりした空氣が漂ふのであります。

又非番の將校などは、午食が済むと定期艇に乗つて上陸する者もありますし、他から友人の來訪を受けて、ビールを飲んだり栗饅頭を頬張りなどして、國防の充實を論ずる者もあつて、誰れも彼も愉快相にに／＼として居ります。

陸上人の生活

皆さんは前に記した日課表の中で、先づ軍艦では意外に夕食の早いことに御氣が付きましたでせう。冬期の三時四十五分、夏期の四時十五分と云へば、普通官廳の退刻よりも早い。殊に夏の四時は、日もまだ甚だ高いのですが、止むなく夕食の箸を採らねばなりません。

普通陸上の人の生活は、夕食後には、別段に仕事もないのでありますが、軍艦ではさうは行かぬ。日課表にも出て居る通り、夕食の後には甲板掃除もあれば、軍事點檢と云ふ大事の役目もあります。又軍艦旗下し方、釣床下し、甲板掃除と之等のことが幕なしに襲うて來ますから、夕食の時間としては、どうしても規定せられた所によらなければならぬのです。

尤も水兵等は血氣旺んな體で、命令のまゝに働くのですから、夕食から寝るまでに、何一つ口にしなないと云ふのは、とても堪へ得られないので、時々『菓子許す』と云ふ令が出ます。勿論菓子と云つても、水兵の食べるのは大抵一袋五錢の煎餅の類で夫れを定まつた室内で揃つてポリ／＼と食べる時は、丸で葦が桑の葉

菓子許す

を食べるやうで、喧しい響を傳へて見てゐるだけでも愉快であります。

さて又軍事點檢とは何でありませうか。碇泊中でも航海中でも、日曜日でも雨天でも、一日として缺かされぬ大切な軍事點檢は、全艦の將士が、戦艦部署に就き、艦長は前艦橋に上つて、各分隊からの報告を聴取つて此の點檢を終るのであります。

即ち夏季ならば、午後五時十分になりますと、『軍事點檢五分前』と云ふ號音が全艦に響き渡ると、各員悉く配置に著くのです。主砲副砲をはじめ全く戦争の場合と同じ形を示すので、其の壯嚴さも亦格別であります。

而し日曜日には多數上陸して居りますから、各部署の受持人員が少くて物足りない。で分隊長の點檢の時、第何番砲上陸員何名と報告します。分隊長は更に之を前艦橋に報告する。動作はすべて喇叭を用ゐ、何のことはない、敵の艦列を前に控へて、満を持すると云ふ有様。

軍事點檢は又同時に、武器の保護と云ふ役目を有つて居ります。即ち大砲其他

の夜露にあたつて不可ないものには、夫れぐ一定の被布を著せさせて、此の作業を點檢するのであります。

士官室士官や、士官次室士官が上陸するのは大抵此の點檢校のことで、點檢が済んでから間もなく出る艦發の汽艇には、屹度五六人の士官が乗り込んで居ります。軍事點檢後の上陸は彼れ等に取つては樂みの中の大なるものでありませう。

次に初夜巡檢と云ふのは、軍艦の女房役とも云ふべき副長が、甲板掛將校を案内として、艦内の整頓を見廻ることでありませう。之より先もう甲板は綺麗に掃除されて、塵一つとして残つて居りませぬ。時間が來ると甲板掛將校は、副長に巡檢宜しと報告します。副長は其の旨を更に艦長に報告して、一定の順序を以て艦内を巡檢致しますので、此の時當番以外の水兵は、悉く釣床に入つて寝て居りますから、副長等は腰をかゝめながら、釣床の連垂してある下を通らねばなりません。

巡檢ッ！巡檢ッ！と響く嚴かな令は、遠くから近くになつて、又だんぐ遠く

なつて夜の更けるのを知らせます。舷窓から港内を見ると、陸上の市街の燈火や、彼方此方に碇泊して居る艦船の警戒燈が、或は赤く或は緑に、チラ／＼と眼を射る其の中を何所の艦の定期艇か白波を蹴立て、邁進する。かうして刻々消燈の時が近くなるのでありますが、士官次室に居る若い人達は麥酒を呷つたり茶を飲んだりして、可なり遅くまで快談を試みるのであります。

附 録

一 軍艦比叡遠洋航海記

その行先

私達が海軍兵學校を卒業して、練習艦に乗り込み、遠洋航海のために、品川灣に錨を卷いたのは、忘れもせぬ明治二十四年の九月下旬、都には秋の風立つ頃で、その行く先は、グアム、ニューブリテン、濠洲のブリスベーン、シドニー、メルボルンの三港、それからニューカレドニア、ニューギニア、スル、マニラ、香港と廻り歩いて、翌二十五年の花咲く四月に、再び品川灣に錨を下しました。『都をば、霞と共に出でしかど、秋風ぞ吹く白河の關』と詠じた、かの能因法師の歌を反對に行つて、初秋の風に征衣の袖を拂はせて、東京灣の一角を出で、花の霞にまた歸り来る。航程一萬四千九百九十六哩、今から思ふと實際恥かしい位の小さな帆走船で、兎も角も首尾よく豫定の行動をとつたのであります。

能因法師の歌

尤も其の當時の兵學校卒業の少尉候補生は、現今の如くに、數も多くありませんでしたから、練習艦とても只一隻だけで、固より艦隊組織ではありませんでした。即ち私達の乗り込んだのは、舊軍艦比叡で、當時の艦長は森又七郎大佐でありました。もとの比叡と云へば、無論今の比叡の如き大艦ではなく、帆を以て走る小艦であつたのです。

そんな小さな艦も、其の頃の日本の海軍としては、先づよい方の軍艦でありましたから、私達は山なす怒濤も恐るゝに足らぬと、非常な意氣込みを以て、喜び勇んで萬里遠航の途に上りました。

さる程に東京灣口を出て、やがて觀音崎を後方に眺め、その日の暮れ方に、野島崎の燈臺を見たのを最後として、故國の土地に別れを告げ、萬里茫茫として涯なき大洋上の客となつたのであります。

私達の乗つた軍艦比叡は、所謂帆走艦で、主として帆を以て進退し、補助機關を備へて居るものゝ、それは主に港の出入の時に限つて使用すると云ふ有様、

觀音崎
野島崎

随つて出港の翌朝までは汽走、それより後は帆走で、専ら風の神の御都合次第、速くもなれば遅くもなりますが、勿論速からうが遅からうが、そんなことは一向お構ひなしで、随分の大きな航海を致しました。

現今の軍艦では、帆と云ふものを全廢されましたが、其の頃の遠航には、主として帆を用ひたもので、風の向きのよい折りは、むやみに走りますが、さて其の都合が悪くなりますと、意外に艦足が遅くなるばかりか、方向によつては、思ふ方に眞直に進むことが出来ません。殊に其の上海流の影響を受けることが多いために、速くなつたと思ふと、又非常に遅くなつてしまつて、兎角自由にならないのです。

されば都合のよい時には一時間七八哩も走ることがありますし、又都合が悪いと、翌日になつても、艦の位置を測つてみると、却つて後戻りをして居ると云ふ、滑稽なことも起るのでした。

所が今度の航海は、幸ひ品川灣出港後は、先づ天候も順當で、何の異状もあり

海流の影響

實地の大舞臺

天測

試験の成績

ませんので、此の分ならば、豫定の如くに、目的地點に進航し得られるだらうと、一同は愉快此の上もなく、グアム島に向つて、南航を續けたのであります。固より練習航海のことでありますから、四ヶ年修學の後、兵學校を出たばかりの私達は、今まで教科書や雛形で、陸上に於て修得した所を、實地に海上の大舞臺に應用し、練習を加へて行ふのであります。航海術、運用術、砲術、水雷術、機關術など、それごとく日課が定つて、或時は當直に立つとか、また或時は晝なり夜なりの天測（天測とは艦の位置を測定するために太陽又は星の高度を測ることです）をやるとか、或は大砲の操練をやるとか、または帆の張り方や、疊み方、マストの橋桁の上げ下しに、水兵と一所に作業するとか、いろ／＼の事業があまりまして、思ひの外に日が早くたつて行きました。

殊に航海が終る頃には、試験と云ふ難關がありました。その試験の成績が、兵學校の卒業成績に加へられ、少尉に任官する時の順序にも關係しますから、なかなか油断がなりません。例へば今日は艦に暈うたから、天測は行りたくないとい

運用術

意外の大事

か、又は天測が無事に済みましても、運算の方に間違ひがあらうものなら、それこそ一大事で、直に試験に影響して來ます。昔も今も此の試験と云ふものは、まことに厄介至極であります。それに運用術に屬する帆の張り方とか、疊み方とか、或はヤード又はマストの上げ下げに用ゐる索具の名や、その導き方を憶える段になりますと、随分頭を悩ましたものです。尤も其の代り只今の如くに、大砲、水雷、機關の方面は、あまり進歩して居ませんでしたから、其の點は今に較べると、餘程樂でありましたらう。

マストやヤードの上げ下げ、その他帆前の作業は、書物の上でならば、多少間違つたところで、大したこともないのですが、さて航海中それを實地にやるのに、號令をかける時期が早いとか、遅いとか、少しでも間違へようものなら、それこそ意外の大事件が出來します。ヤードが落ちかゝつて來たり、水兵が檣の上から墜落するやうなことになります。さればそれ等の呼吸をよくのみ込

み、天候の變化に應じて臨機的手段を講じ、或は兵員を上手に指揮することや、其の他海上の軍事上一般、將校として必要な教育を受けるのが、即ち練習航海の目的であります。

又海上のことは、一から十まで、経験を積みねばなりません。云はゞ今度の航海も、私達にとりましては、此の経験をうる第一歩に過ぎないのであります。が、それを空々に過してしまつたのは、今考へてみても、實に恥づかしい次第であります。

さて出港後の二三日は、初めての航海でもあることゝて、大分船暈に悩まされましたが、それも次第々々に慣らされて、来る日も来る夜も、同じやうな仕事を繰り返して、だん／＼南へ下りましたので、此の間で一ばん面倒なことは、風の方角の變る毎に、ヤードの方角を直すことや、風の強弱によつて、帆の數を増減すること、之等の作業は、晝夜の區別なく行はねばなりません。所が現今の軍艦は帆前船ではないから、こんな面倒は全くなくなつてしまひました。

さる程に九月の末頃から、風力はだん／＼と衰へて、一晝夜の航程が、十月一日には四十七哩、同二日には僅かに二十四哩、つまり一時間平均一哩の速力しか出ないやうになりました。試みに甲板上に立つて、四方を眺め見渡すと、渺々たる大洋の中に、山なく島なく、風もなく波もなく、鏡の如き海面に、漂ふものは我艦ばかり、加ふるに暑さは次第に骨身にこたへるやうになりました。

所がかう云ふ風の折には、得て鯨がついて来るもので、それを、釣り上げるのも、亦航海中の慰みの一つであります。さて此の鯨を釣るのには、先づ太い綱の先に鎖をつけ、その端に大きな鈎を附け、それに牛肉を縛りつけてやるので、かくして忽ちの間に大きなのを二三尾釣り上げたこともありました。

殊にその頃の艦には、冷蔵庫などの備へもありませんので、毎日の食事も、三度か三度罐詰ばかりで、牛肉を口にする機會がありませんから、此の鯨の肉は大分食卓を賑はせました。尤も鯨の肉は格別うまいものではないのです。

さて私達の艦は、小笠原島の東南方五百哩ほどの地點に居つた時、殆ど二日

風漸く強し

間無風の後、十月二日の午後より、だん／＼東風が吹き出して、しかもそれが次第に強くなり、且つ少しく北が／＼りになつて來ました。三日には風力いよく強く、隨て浪も高くなりましたが、併し天氣は相變らざる青空で、さして心配もない様子。その日の夕景には、大分帆の數も減じ、約五枚ほどしかかゝつて居ません。風はますます／＼吹き募るばかり。

すると此の日の日没に、天色一面に眞紅の色に染められ、何とは知らず、異變が起りさうに思はれました。夜に入ると共に、星はキラ／＼輝き渡り、強風颯颯、波浪はしきりに襲ひ來つて舷側を噛み、艦の動揺も漸く加はりましたが、やがて夜の十一時半頃になり、満天墨を流したやうな黒雲に蔽はれ、續いて銀針を飛ばす如き豪雨を來し、風力は猛烈となり、慘澹たる光景を現出しました。

折から暗を破つて、

「總員上へ——」

暴風雨襲來

の只ならぬ號令が、帛を裂くが如くに、全艦内にひびき渡りました。

ソレッと云ふので、全員が總立ちになり、續いて下る號令に従つて、上甲板へ走り出しました。見れば四面暗黒にして咫尺を辨せず。電光閃々猛雨沛然、狂瀾怒濤勢ひを得て、艦は縦横左右に動揺はげしく、今にも轉覆するかと思はれる壯絶凄絶の有様は、筆にも口にも述べつくすことが出來ません。併し私達は一糸亂れずに、同心協力して、帆を疊んだり、ヤードを縛つたり、總ての移動物を固定したり、昇降口を閉ぢたりして、終夜荒天作業に従事し、何等の遺憾もなく之を遂行したのであります。

荒天作業

かくて一方には、汽罐の至急點火を命ぜられ、間もなく其の運轉を開始しました。艦は澎湃たる激浪の中を或は右に或は左に、或は上に或は下に、揺られ／＼て進むのであります。併しかうなつては、出来るだけの力を盡した後に、天運を待つの外なく、執るべき手段もなかつたのです。

所が翌朝になりますと、いくらかよいかと思ひの外、天氣は依然として悪く、

風雨怒濤いよ／＼力を合せて荒れ狂ひ、帆は散々に破れ、ボートは奪ひ去られ、舷側は無惨に壊され、その他到る所に多大の損所と缺陷とを生じました。

また此の間に於ける、下甲板と上甲板との交通は、たゞ前部に一ヶ所、後部に一ヶ所を開くばかり。他は全部密閉されて、波浪の侵入を防ぎ、窓の如きは無論開くことが出来ませんから、下甲板の空氣は甚だしく汚され、蒸し暑いこと夥しく、不快限りないので、今の場合にはそんな事を考へる者なく、たゞ／＼一刻も速かに、嵐の靜まるのを待つの外なかつたのです。

艦の動搖があまりに烈しいので、飯を炊くことも、料理をすることも出来ず、餘義なく堅いビスケットと水とで、漸く腹の蟲を慰めた次第、又甲板の上には、太い繩を張り廻し、それに掴つてやつと往來する始末。もしも其の手を緩めやうものなら、直に艦外に投げ出されて、激浪に吞まれてしまひます。即ち當時の有様は、凄絶壯絶と云ふの外には、形容の言葉もなかつたのです。

かく不安のうち、一日を經過して、四日の午後四時頃になりますと、風雨計

ビスケットと水

天候恢復

の降下も止り、其の後はだん／＼昇りはじめましたので、皆々聊か愁眉を開きました。それより風雨次第に勢ひを減じ、五日の正午には快き晴天となり、こゝに全く颶風の區域を抜け出すことが出来ました。

されば波も和いで、六日はいよ／＼天氣晴朗、風もソヨ／＼吹いて大海に浪立たず、前日の嵐は何所へ行つたやら、まるで夢のやうな感がありました。

さる程に七日の朝には、嬉しくも島影を認め、翌八日の早朝、品川灣出港後十八日目に、當時はまだスペイン領であつたグアム島のサン、ルイ、アブラ港へと安著致しました。此の後にもまだ／＼壯快な話がありますが、まづこゝらで一段落と致しませう。(平賀少將談)

二 軍艦阿蘇遠洋航海記

十一月二十五日、あゝ今日は、私達の出發する愉快な日です。一萬九千哩の航海、日數に つもつて百二十五日、私達の艦には、司令官加藤定吉少將が坐乗

されました。其の目出度い門出を祝ふとて、午前八時十三分には、加藤吳鎮守府司令長官が來艦せられ、ついで伊東元帥、上村、瓜生、島村、伊集院の諸氏が、續々おみえになり、殊に上村第一艦隊司令長官は、候補生一同に對して、『勇壯にして十分に奮勵せよ!』との、訣別の辭を残して去られました。

午前九時には出港準備、十一時には出港用意終り、その四十分、先づ私達の僚艦たる宗谷が動き出し、次いで阿蘇も動きはじめました。

横須賀港に碇泊して居る、多くの艦船は、みな一齊に登艦禮式を行ひ、『安全なる航海を祈る』旨の信號旗を掲げましたから、私達もまた登艦禮式を以て之に答へました。

かくて十二時には、曳索を放つて、いうく進航をはじめました。今より後四ヶ月、私達は其の授けられた任務を全うして、再び此の横須賀の港に錨を投げ入れる日は、もはや上野や向島に、櫻の花の咲きかける時節でありませう。まづそれ迄は皆様おたつしやでと、私達は南へくと向ふのでありました。

登艦禮式

ロングサイ

見送り人の乗つた船、樂隊を乗せた船は、猶も私達を追つかけて来て、離れようとは致しません。彼方ではロングサインの、花のやうな音楽を奏し、私達も亦奏樂を以て、之に答へました。あ、此の時、日東海國男子の意氣は、天をも衝かんばかりであります。

艦の影の見えなくなるまで、雙方共帽子をふりハンカチを振つて、別れを惜みました。南の風が吹き出して、艦が少しユラユラする頃には、もう見送りの艦は、一艘もなく、ただ大浪を恐れぬ二隻の驅逐艦ばかりが、平氣で波を蹴立てながら、港の口まで私達を送つて来て呉れました。

天は清く晴れて、白い雲の塊が流れ、海はきれいな藍色を湛へて、白い蛇のやうなうねりがあるばかり。遙かに屹然として高く聳ゆる富士の山は、千秋萬年の白雪を頂いて、私達の航海を見送る如くに見えて居ります。

さて午後四時に近い頃、商船學校の大成丸が、館山灣に假泊して居るのを見ましたが、折から俄かに浪が高くなつて来て、機關室や浴室の水はき口から、漣の

海上の富士

如くに海水が浸入して來ますので、みるゝ士官次室、糧食庫などは、水攻めの苦みを受け、膝まで水の中に没しながら、バケツを以て汲み出すと云ふ大騒ぎが起りました。

五時五分には、總員の軍歌合唱がありました。浪はいよゝ高く、たけり狂うて舷側にうちつけます。軍歌と浪の響とがごつちやになつて、壯快限りなく、次で軍樂隊もまたその練習にとりかゝつたので、廣い海のまん中で、かう云ふ催しを致しますために、海龍王も定めし驚いたことせう。其のためか艦の動き方が、だんゝ烈しくなりました。

やがて日は西海の水平線上に没しようとして、見える限り、天が眞赤になりました。西の方には、伊豆の大島が、海坊主の頭のやうに、黒くヌツと立つて居ります。美しい富士の姿は、まだ私達の目から去らうとは致しません。

日が暮れますと、浪は高く、風もはげしくなつたので、新たに乗り込んだ四等水兵などは、大方船暈に苦しめられて、顔は青菜の如く、候補生の中にも、頭の

上らぬ者が出來ましたが、それでも胃液を吐きながら、當直のつとめを怠る者は、一人もありませんでした。

何しろ浪がはげしく打ち込みますので、窓と云ふ窓は、一つ残らず密閉されて、空氣の流通が大變に悪くなり、しかも艦の動揺はますます加はるばかりですから、かうなつては餘程艦になれた者でも、決して樂ではありません。

二十六日、今日は日曜日であります。昨日の夕方まで、私達を送つてくれた、あのなつかしい富士の山も、昨夜のうちに何所へ行つたやら、今日は姿を見せません。東西南北、どちらを見渡しても、限りのない青海原に、波を蹴つて進む二隻の艦のあるばかり、他には草一本も板ぎれ一つも見つかからないのです。

文章や詩では、海の上の景色にも、岩だの鷗だのと、いろゝの景物があまりますものゝ、實際かう云ふ大洋へ出て來ますと、海水の外には、何一つの景物もないから、全く別世界に居るとしか思はれません。

二十九日、今日からは上白下黒の夏服姿に變りました。また麥稈帽子も許され

ました。日本の内地では、もうソロ／＼綿入の出る頃ですが、此方は暑くて／＼たまりません。午後三時頃です、左舷に當つて、夥しい鱗の群つて泳ぐのを見ました。此の夜は六時三十分から探海燈を點火しましたが、之もたしかに大洋上の一大壯觀と云つて宜しい。六時三十分と云ふ時刻には、いよいよ熱帯の圈内へ入りました。丁度夕立がやつて来て、これがために皆々ホツと息をつきました。十二月一日、もはや十二月になりました。日本では餘程寒氣もはげしくなつたでせうが、南へ／＼と向ふ私達は、毎日々々暑さを増すばかりで、日蔭でさへ温度八十二度、日向へでも出ようものなら、夫れこそ大變、汗は瀧のやうに流れて、體中の水分が無くなるかも知れません。

さる程に私達は、横須賀軍港を出發してから、幸ひにして日和至つてよろしく、大した暴風雨にも出逢はず、潮の加減も順調ですから、之ならば二日の夜半には、グアム島に到着することが出来ませう。併し夜半の入港は、何かにつけて不便が多いからと云ふので、明日午後三時の入港に決定されました。

グアム島

遠航の趣味

眞夜中頃に、上甲板に出て見ますと、渺漫たる大洋は、萬里涯なく、月は中天にありて美しい光を投げ、清風徐ろに吹いて、白雲舞ひ波浪歌ふと云ふ有様で、こんな壯快な趣は、遠洋航海をした人でなければ、味ふことが出来ませぬ。

二日、土曜日午前十時四十分の頃に、グアム島のリテシアン鼻を、左舷艦首約二點の地に認めました。はじめは地平線に接して、茫漠として明かには見えませんでした。次第々々に接近して、左舷の眞横に見るに及び、島嶼の北の端には、巖石が峙つて、天然の堡壘の如く、緑の樹木が生ひ茂り、それより南には山岳の多いことも知られました。そこで午後二時半にアブラ港に向ひ、三時半第一浮標に錨鎖をつなぎました。こゝは横須賀を距ること航程實に千百哩の地でありませぬ。

すると間もなく、グアム政廳の訪問使として、米國の海軍中尉がやつて來ました。四時少し過ぐる頃には、劍山丸が入港しました。此の劍山丸は、我が練習艦隊に、石炭を供給する目的で、スバ島まで私達に従つて來るやうに命をうけ

スバ島

て、門司からやつて来たのでした。

アブラ港内には、清水商會の虎丸を合せて、都合四隻の船が居るばかりですが、何れも橋頭に日章國旗を翻へして居りますので、私達は帝國の領土内に居るやうな氣がして、實に愉快でした。

一體此のグアム島は、マリアナ群島中の最南に位置を占めて居るので、千五百二十一年に、有名なるマゼランの手によつて發見せられた島ですが、米西戦争の結果として、西班牙の手をはなれて、米國領となつたものです。島の大きさは、丁度我が國の淡路島ほどであります。

三日、八時半我が加藤司令官は、中島阿蘇艦長、平岡宗谷艦長と共に、島司サリスブレーを、首府アカニアに訪問するために上陸せられ、候補生や兵員も、八時から半舷上陸を許されました。見渡す所濟内には、所々に珊瑚礁が散在して、これがために航路を掘り下げたと聞きましたが、それでも猶水が浅くて、ボートをあやつるのに、非常の不便を感じました。

マリアナ群島

首府アカニア

牛車

さて海上三十分ばかりで、ピフと云ふ村落へ上陸しましたが、こゝは人口僅かに二百ばかり、北方六哩の首府アカニア迄は、車馬の便がありません。尤も之は牛車で、一人半弗を輿へれば、五十分ほどで達します。馭者は十二三歳の少年で、多くは無蓋のみすばらしい小車を、牛がノソノソと牽きます。一車三人乗りで、強く鞭をくれますと、牛とは云へなかく早い速力でかけ出しますが、こんな景色も一寸他では見られぬ圖でせう。

村落の有様

車上から村の様子を見ますのに、兩側には椰子の木の間、土人の家が立ち並び、牛や豚や鶏の如き家畜類が、なか／＼澤山飼養されてあります。間もなく村落を出はなれますと、兩側はたゞ椰子の並木ばかりで、大きいのは約五丈ほどの長さがあり、青い大きな實も澤山なつて居ました。やがて路は谷合に入り、また海岸に出て、凡そ四哩も来たかと思ふ頃、前面を走つて居る一臺の馬車を見つきましたから、乗客たる私達は、手眞似で以て馭者の少年に、『あの馬車を抜け!』

と命じますと、少年は肯きながら、強く一鞭を牛の背にくれますと、牛はさも驚いたやうに、ビヨンと跳ね上つて、飛びながら進み、此方の車を馬車の輪にかけたから堪りません、索具がきれて轉覆しさうになりました。所が其の破損は又急に修繕が出来さうもありませんので、皆が車を下りて、いよ／＼膝栗毛に鞭うち、汗だく／＼でアカニアまで達しました。

さてこゝは、人口凡そ六千の都會で、土人の家と米人の家とが、雑然として並んで居ます。土人の家は地上から三尺乃至五尺ほどの柱を建て、其の上に家を造り、板床板壁で、表面は石灰を以て白く塗り、屋根は椰子の葉で葺いてあります。又二尺四方位の窓がありますが、之は家の大小によつて、二個のもあり五個のもあります。

土人は主として農業を營んで居りますが、何しろ天然の産物が多く、殊更に耕作に勉めないでも、思ふ存分の收穫がありまして、随つて住民は一般に怠慢で、貯蓄心もなく、日用品飲食物までも、海外に仰ぐと云ふ有様。椰子の實の採集位

土人の家

天産物

をして、悠々と其の日を送る者が多いと聞きました。

曾て十七世紀の末頃に、此の島へ布致に来た一人の僧侶がありました。先づ會長の子に洗禮を受けさせようと思つて、之を河の岸に連れて行き、いよ／＼儀式を始めますと、あまりの不思議さに、會長の子は、大聲あげてワイ／＼泣き出しました。

すると家の中に居て、自分の子供の泣き聲をき、つけた父の會長は、さては我が子の一大事であると、急いで家を飛び出して、たゞ一刀の下に、かの僧侶を斬り殺してしまつたと云ふ、野蠻な物語が今も猶残つて居ります。

また有名なヒリツピン獨立軍の大將アギナルドの殘黨が、約四百人ばかり、米國軍に捕へられて、此のグアムの牢屋につながれましたが、彼等は或夜相談をして、脱獄を企て、闇にまぎれて逃げ去らうとしました。

かくと見た番兵共の驚きは一方ならず、牢屋の内外に論なく、人影を見れば直に銃殺し、猶も萬一を慮つて、牢屋の窓から彈丸を亂射しましたので、或者は

野蠻な物語

傷つき、或者は死し、或は床上に臥し、或は地に潜り込み、或は壁に倚りかゝつて銃口を避け、辛うじて生き残つた者は、半數にも充たぬ百五十人ばかりでありましたが、それ等の者は、其の翌朝になつて、一人残らず縛り上げられ、海岸の岩石に繋がれて、身動きさへ出来ませんので、二日ばかり泣き叫んで居て、みな死んでしまひました。尤も其の主謀者は磔になつて殺されたと云ふことです。

十二月九日、午前六時にアブラ灣を出港して、フィジー島のスバへと向ひました。此の航程凡そ三千哩、日を経ること十五日、暑熱は日毎に増すばかり、昨日の夕刻には、グアム島在住の我が同胞の重なる人々數十名が、船を出してわざわざ告別に來て呉れました。折から夕日は、地平線下に没しようとして、我が艦では君が代の奏樂のうちに、軍艦旗を下しましたが、見送りの同胞は、聲はり上げて、帝國海軍の萬歳を叫び、さも嬉しげに別れ去つたのであります。

あゝ我が旭日の御旗の翻る所、民族の發展は之に伴はねばなりません。グアム島の如きも、土地としては頗る小さいけれども、猶開拓するものが澤山ありま

す。わが健氣なる同胞よ、南にゆけ南にゆけ、汝の腕にまつ所は、それは〜澤山澤山あると、私達は叫び度いのです。

十一日、目に見えるものとしては、五色の雲うつくしく空を彩る所、濃い緑の海に、私達の阿蘇の姿と、二番艦の宗谷の姿とが、堂々として進んでゆくばかり、さアこゝで少しく艦内兵員の有様を物語ることに致しませう。

兵員の洗面用としては、各自眞水五合ばかりを、櫛ではかつて分與せられるのですから、もしも西洋手拭の類を使用すれば、それこそ一滴も餘さずに吸ひ込まれてしまふでせう。

艦内で水の貴重なことは、陸上の人の夢にも思ひ及ばぬ所で、殊に長途の航海に於きましては、海水を蒸溜して使用する外には、全く之を得る方法がありませんから、たとへ一滴の水と雖も、決して粗末にすることは出来ません。

此の日の午後、三名の機關兵が、日射病に罹りましたが、殊に越後四等機關兵は、最も重態であります。彼れは搬炭員として、溫度九十四度の所で、忠實に

勤務して居りましたが、遂に此の恐るべき病氣にとりつかれ、親切な戦友に伴はれて、病室へやつて来ました。

彼れの病状は、はじめ非常の興奮状態で、手も足も痙攣を起しましたが、後には強直状態となり、體温が四十二度に上りました。そこで軍醫官もいろ／＼と治療の方法を講じ、或は通風を計り、或は冷水灌漑法を施したり、或は食鹽水の注射を試みられましたが、痙攣が頻りに起つて、心力も呼吸もだん／＼衰へ、臨終も近く迫つて来ましたので、艦内は俄かに憂ひの雲に閉されました。

水兵の死

十三日、午前一時十分と云ふに彼れは遂に此の世を去りました。そこで柩を上甲板に置き、幕を張り造花を供へ、皆々焼香して、手厚く弔ひました。彼は秋田縣能代の人で、年僅かに十八歳、故國をへたつる數千裡の太平洋上に、水づく屍とならうとは、勿論思ひ浮ばなかつたでせうに、あはれなことを致しました。

さて本艦では、艦長以下が相談して故人を弔ひ、遺族を慰めるために義捐金を募り、宗谷に於ても同様のことがありました。此の日の夕刻からは、遊戯を許さ

れましたが、鳴物は禁止でありました。

十四日、午前六時半に解散して、宗谷との距離が遠くなりました。そこで九時より越後四等水兵の葬儀が行はれました。即ち先づ柩を後甲板にうつし、故人の寫眞を飾り、司令官以下の香奠を供へ、造花二籠を捧げました。時に宗谷艦長からは、無線電信によつて、弔詞を申し來られ、岡本機關大尉は祭主として弔文を朗讀せられ、加藤司令官以下高等官、候補生准士官、及び下士卒各部代表者の焼香がありまして、兩艦は半旗の禮を行ひました。

半旗の禮

それより艦の進行を止め、ピンネース、ダビットに釣して柩を下し、衛兵隊の弔銃と共に、軍樂隊は、『命をすて』の樂を奏しました。かくて總員最敬禮の下に、柩は徐ろに水中に没してしまつたのです。

式がすんでから艦長は、總員を集めて、故人の病状やら經過を告げ、萬難に屈せぬ體力を養成して、一朝有事の日に備へよとの意味の訓示がありました。午後は大掃除、明日はいよいよ赤道を通過するので、赤道祭をしなければなりません。

赤道通過

ん。
十五日、午前十一時頃左舷艦首に當つて、海豚の大隊が高く背を現はし、列を作つて、白波を蹴立て、さも勇しく行進しつゝ、私達を赤道へ案内する様に思はれました。

さて私達は、晝の食事を終ると共に、赤道祭の諸準備に著手しました。正三時といふに、赤道の神は、前檣の上から御降下になります。見上げますと、赤地の直垂に金剛杖を持ち、一本齒の高足駄をはき、艦の動揺につれて、よろ／＼として、如何にも危ふげに見うけられます。

赤道の神は、頬赤く鼻高く、さながら鞍馬山の天狗が、神通力を失つて、こゝに天降つた如く、二人の雷神を、お供に連れて居ます。此の時軍樂隊は、にぎやかな軍艦マーチを奏して、之を歓迎しました。神は群集の間を、い／＼と通つて、後甲板へと向ひました。之に引き續いて、異形奇態の假裝行列が、ゾロ／＼とついて行きます。やがて赤道の神は、司令官の前に来て、辨慶が勸進帳を讀

赤道の神

むやうな身ぶりをして、歓迎の辭を朗讀し、終つて赤道突破の大鍵を渡し、

「行け！」

と大喝一聲しました。すると司令官は、御降臨の勞を謝し、御親類の暴風の神や、炎熱悪疫の神は、もう澤山ですから御免を蒙り度いと頼まれますと、赤道の神は快く、

「オ、よし／＼！」

と頷き給ふのであります。

こゝで赤道の神の發聲によつて、陛下の萬歳を三唱し、群衆も亦之に和して、艦内にひびき渡りましたが、此の時正に三時十五分、實に赤道通過の時でありま

萬歳三唱

神と司令官

海面を見渡しますのに、風もなく浪もなく、ゆらり／＼とうねりの来るばかりで、疊を敷いた様な大海原に、赤い線が見えるなど、面白半分に打ち騒ぐ人さへありました。かくて行列は艦内を一巡して後、赤道の神と一所に、記念の撮影

龍巻

を致しました。

此の時左舷艦首に當つて、遠く雲低く垂れ、雨も降り出して、猛烈なる龍巻の如きものさへ見えましたが、これこそ赤道の神が天上へ歸られるのではあるまいかと思はれました。かくて四時半、司令官はじめ下士卒に至るまで、總員上甲板で食事をして、下士卒は赤飯の御馳走に、日本酒と氷の分配を受け、中里副長の發聲で、祝賀三唱、食事に著いて杯をあげ、候補生ばかりはサイダーで乾杯したのであります。

十六日、朝九時に驟雨が來ました。總員身體を洗はうと思つて、上甲板に出ましたが、雨量が十分ではありませんから、裸體のまま、で體操をやつて待ちました。雨は遂にやつて來ませんでした。

十七日の午前八時頃にも、亦驟雨が來ましたから、例の如く裸體になつて、甲板上に出ましたが、何しろ風は暗雲を送ること急に、雨は横に吹きつけて來て、豆でも打つやうに、痛くてたまりません。

艦體動搖

所が夜に入ると共に、風はいよゝゝ強く、波は舷側に碎けて、恐しいひびきを立て、飛び散りますが、其の割合に艦の動搖は強くありませんでした。

十八日、風は甚だ強く、殊に午後になつてからは、艦體の動搖がますます烈しく、怒濤は、折々上甲板へも押しよせる有様、夕刻になりますと、燕のやうな形をした小鳥が、數十羽群をなして、舷側に飛んで來ました。此の鳥は全體黒く、中には頭の白いのもありました。波を枕に一寸休まうとしても、此の大浪では逆も落ちつくことが出來ませんので、ドン／＼艦内へ入つて來ます。

無人島の鳥

この小鳥は、平生無人島にばかり棲んで居ると見えて、捕へられても少しも人を恐れず、甚だしきはさし出した手の上へ來て、其の愛らしい翼を休めるものさへありました。かくて午後四時頃から、いよゝゝ荒天準備を行ふことになり、救助艇を艦内に入れ、動き易いものは十分に結束して固定させ、無線電信の垂直線を下して、輕便なものに改め、甲板上には命綱を張つたのであります。雨か風か、來らば來れ、艦を打ち越ゆる大浪のために、甲板は流した如くによ

命の綱

ぬれ鼠

不安の一夜

く洗はれ、や、物凄光景を呈して来ました。候補生たちは、芋蟲の如くに揺られた釣床を下すとて、昇降口に走れば、艦體が急に傾いて、足をさらはれ、コロコロと迂り轉ぶ有様は、滑稽と云はうか氣の毒と申しませうか、泣顔して彼れ等の起き上らうとする時には、待つて居たぞと云はぬばかりに打ち込む大浪、全身ぬれ鼠の如くになつてしまひます。

さて我が後方から来る宗谷の有様は、どんなであらうと見やれば、同じく大浪に弄ばれて、一上一下、或は右に傾き、或は又左に、艦首を浪に打たれては、潮水が瀧の如くに落ち來り、はげしく傾く時は、赤い腹を恥づかしげもなく現すなど、時々刻々險惡の状態に陥るのであります。

すでにして日は全く暮れ、後部の下甲板は、通風最も悪く、士官次室の釣床は、こゝに設けられました。後しる通風が悪いので、全身の流汗甚だしく、加ふるに糧食庫の米の臭氣さへ加はつて、更に安眠が出来ません。否そればかりか、夜に入つても風濤ますます烈しく、何れも不安の一夜を過したのであります。

す。

第六ハツチ

恰も此の夜十一時頃、殊に大きな一怒濤は、轟然として後甲板を呑み、第六ハツチから海水が打ち込んで、それが直下三丈の下甲板に落ち來り、さながら落雷の如き凄じい音を立てました。下に眠つて居た兵員達は、何れも釣床に潮水を受けてズブぬれとなり、中には頭を水中に没したもののさへありました。

しかも甲板上の水は、艦の傾斜すると共に、或は流れ去り、又は流れ來り、脛を洗ふばかりなので、バケツを以て汲み出す騒ぎは、一方ならぬ混雜でありました。

十九日、不安の一夜を明しても、風はなかく吹き止みさうもなく、浪もいよいよ荒れ狂ふばかり、猶また豪雨さへ之に加はつて、八千噸の大艦も、木の葉の如くに浮きつ沈みつ、もう人の力ではどうともなりません。

みなさん試みに思うても御覽なさい。際涯なき大海の上に、何の防禦物もなく、暗澹たる密雲は空を蔽ひ、斷雲の飛び行く有様は、矢よりも猶早き所、巨濤

舷側にあたり、碎けては自然の大瀑と化して艦上を包み、展望としては僅に二漣、四面糲糊として、たゞ物凄じ色を見るばかり、如何に海國男子が立派な腕前を有つて居ても、かう云ふ大きな自然の偉力に對しては、龍車に向ふ螻蛄よりも劣つて居ります。

朝食にとて、賄所で汁をつくりましたが、これも半分以上は既に釜の中で傾けられ、又其の残りの汁を分配された食卓では、配食の際に食器が滑つたり覆つたりして、中には一口も吸はなかつた者さへありました。しかも此の日は、終日風強く、浪もはげしいので、日中とは云へ夜も同じことで、誰れも仕事をせず、たゞ手を空しうして、天氣のよくなるのを待つ外はありませんでした。(阿蘇乗組一士官談)

三 軍艦淺間遠航挿話

▲横須賀在泊

長い間茶褐色の支那朝鮮の禿山ばかり見て居た目で、久しぶりで内地の青々とした山を望んだ時には、しみぐと日本の風景がよくて、世界の樂園であると感じました。青い島と白い帆と、それが纏れ合つて、天然の函庭をつくつて居る瀬戸の内海、倒にかゝつた白扇を、再び倒にうつして見せた田子の浦、見慣れた私達の目にも、今更の如くに美しく感じさせます。しかし實際何よりも私の嬉しく愉快に思つたのは、三月二十六日(大正三年)の朝、三崎の沖を廻つて、艦が東京灣の入口にかゝつた時でありました。忘れもしません、その日は大粒の雨が、北風に吹きまくられて、冷たく頬をうつてくる、いやな天氣でありました。しかし雨の降る中を、甲板に立つた私は、牛の背のやうな房總の山々、霧の中に一きはハツキリと白く見える観音崎の燈臺、黒い煙に煤けた横須賀の港を目前にして、永々と思ひ出の糸をくり返してみました。五年あまり都の空氣に育つた私には、東京は第二の故郷であります。横須賀に入港することは、郷里に歸つて母の懷中に抱かれるやうなものであります。

吾妻

糧の食ひ物

横須賀に於ける四週間足らずの在泊、それは主として遠洋航海の準備のために費されたのです。しかも其の準備作業は、なかく澤山ありまして、短い在泊中誰れも彼れも、晝夜兼行で、それはく忙しく働きました。

殊に私は其の當時、吾妻に乗つて居りましたが、吾妻は此の短い時間を利用して、ドックに入つての大修理、不用の品はすべてとりまゝとめて陸揚げします。舷側に斜にくつゝいて居たネットスパーは、ネットと一所に陸へ上つて行きます。また候補生は、忙しさうに都の見學に出て行きます。

四月の十日に、吾妻が腰湯をしたやうに、腰から下を美しくぬり立て、ドックを出て来た頃には、大分作業も捗つて、残る所は石炭と糧食、艦の食ひ物と、人の食ひ物との積み込み位のこととなりました。そのうち拜謁の日とりも定つて、人々は皆遠洋航海と云ふ楽しい希望を胸に描いて、只ツハくとして待ち遠しいやうな、名残り惜しいやうな、出港の日を待ち構へて居りますと、時も時、『皇太后陛下崩御遊ばさる』と云ふ、意外の悲報が傳つて、五千萬の赤子は涙に

くれて、言葉も出なくなり、人々の袖には、悲しみの色の黒い布片がまとはつたのです。

謹んで哀悼し奉るうち、三日間の廢物が終りますと、静かに再び出港の準備にとりかゝり、糧食も石炭も首尾よく積み込んで、さアいつでもよしと、悲しい眉の間にも、安心の色を浮べました。

▲ 出 港

時計の針は絶間なく廻つて、やがて四月二十日の曙の色は、私達の目の前に現れました。夜半から吹き出した風は、まだ其の勢ひを収めさうもなく、随つて波もかなり高いのです。しかしいよく今日が出港と云ふので、皆々の氣も引きしまつて来ました。二三日前から、親戚や知人が、送別のしるしとして、いろいろの土産物を置いて行きます。風月堂の栗饅頭、森永の洋菓子などは甘黨向き、エビスとかキリンとか云ふ辛黨のもの、それ等が狭い士官次室の棚の上に、一ぱい積み上げられました。

送別の品々

送別の人々

いろ／＼の土産物の中に、一寸風変わりなのは、硝子罎に入れた五尾の金魚、どれも皆威勢のよい、揃ひも揃つた緋色の金魚、私達はそれが又如何にも嬉しかつた。長い間の航海中に、どんなに淋しい心を慰めて呉れることとせう。

今朝は早くから、送別の人々が艦に押しよせて來ます。西洋流に手を握るもあれば、羽織袴で丁寧な辭儀する人もあります。その挨拶の言葉も、

『御機嫌よう』

『安全なる御航海を！』

『どうか御無事で……』

こちらは『ありがたう』を幾度もくり返して、之に答へるものゝ、其の忙しさは並大抵ではありません。

午前八時半になりますと、通常禮服に改めて、淺間に集合しました。こゝは旗艦だけに、人の出入りも一層はげしい様子で、水雷戰隊司令官、工廠長、港務部長、在港各艦艦長などが彼方からも此方からも、汽艇を飛ばして來訪されます。

長官汽艇

やがてそれ等の來訪者が、順次退艦せられまして、艦上が一しきり静かになりますと、やがて中將旗をたてた長官汽艇が、浪を蹴たて、やつて來ました。また續いて三隻の水雷艇が、海軍省からの高官を乗せて、勇ましく進んで來ました。總員は定めぬ位置に整列して、之を迎へました。一月に佐世保でお目にかゝつたばかりの、大臣代理島村教育本部長を眞先きに、伊集院軍令部長、片岡、上村、出羽各大將、山下軍令部長、ツイ此の間まで兵學校で慈父と仰いだ山下中將閣下の英姿を、後甲板に見出した時、二百四十の候補生の目は、一様に嬉しさ喜ばしさに輝き渡りました。

思へば去年の十二月、三年の間住みなれた學校を出て、初航海の途に上つた時、あの兵學校の白い棧橋の上に立つて、艦の見えなくなるまで、見送つて下された時のお姿を其のまま、遠洋航海の途に上る今日を、再び閣下の御見送りを受ける候補生の胸の中は、どんなでありませう。

百日あまりの近海航海に、朝も晩も潮風に吹かれて、色は黒くなり、一段と武

者振りの上つた愛児の様子を見られた中將の顔にも、無量の感慨が溢れ出て、物言ひたげの御様子であつたが、とうとうしまひまで一言も仰せられず、其のままお歸りになりましたが、しかし御胸のうちでは、どんなに喜んで居られたでせう。候補生の或人々は、眼に一ばいの涙を湛へて、嬉しさを耐へて居る者もあつたのです。

十時半に、島村大臣代理の御挨拶がありました。數百の人の目は、一語も聞き洩すまいと、中將の口の邊を見つめました。所が重々しく動く中將の唇からは、たゞ一言、「大臣閣下から宜しく」と、至極簡單なものでありました。

さて挨拶を終られた中將は、進んで司令官と前列の二人の候補生とに握手して、前途を祝福せられ、やがて來艦の順序のやうに、退艦せられました。中將の胸間に輝いた大きな勳章と、袖に巻かれた太い金筋とが、いつまでも目につきます。候補生一同は、希望に充ちた目で見送り、あとは大嵐の過ぎたやうに静かでありました。

十一時十五分、旗艦に信號旗が揚りました。

出港用意！

狭い横須賀軍港の口に、尻を向けて居る艦を、グルリと一廻轉させるために、小さな子供のやうな港務部の汽艇がやつて来て、親のやうな大きな艦を、甲斐甲斐しく曳きました。其の間が凡そ一時間ばかり、艦が漸くにして港の口の方に向き直りますと、此の重い役目をすました汽艇は、イン／＼として歸つて行きました。

いつもならば、賑かな軍樂のひびきと共に、大勢の見送り人に送られて、威勢よく出て行くのでありますが、今年には深い悲みに沈んで居るので、其の事もなく、且つ朝からの曇天は、とうとう泣き出して、大粒の雨が、ハラ／＼と帽子を打つて來ました。

乗員の家族や知人等が、十人ばかり港務部の汽艇で、如何にも淋しげに送つて來ました。在港の各艦は、一齊に登艦禮式をして、遠航の私達を送つて呉れま

した。そこで此方からも、登舷禮式を以て之に應へましたが、此の時幾萬の人は、悉く聲を収めて、咳一つする者なく、ひやくは回轉する機械の音と、艦首の軽く水を切る音ばかり。

單縱陣

單縱陣を作つた私達の艦隊は、一秒毎に日本の岸に遠ざかるのです。第二驅逐隊と、第六十七、第七十號の二隻の水雷艇とが、港外まで送つて呉れました。ふり返つてみると、緑の木々に包まれた横須賀の山は、淡い雨の中に煙つて居ます。煤ぼけた工廠の大きな建物も、近くに見えます。新橋に行く汽車でありませう。汽笛と煤煙とを殘して北に走つて行きます。

「總員登舷禮式の位置に整列！」

とかう云ふ號令に驚かされて、急いで我に返れば、はや港外に出たのか、波もいつの間によら、少しく高くなつて居ります。即ち私達を送つて來て呉れた驅逐艦と水雷艇とが、今や首を廻らして元の古巢の横須賀へ歸らうとして居る所です。

信號

みれば其の細いマストには、

「安全なる航海を祈る！」

と信號して居ます。そこで此方からは、

「御用意を謝す」

と挨拶しました。私は艦の上から、波間に見えつかくれつして、忙しく歸つて行く驅逐艦や水雷艇の行方を、心配しながら見送りました。

かくて午後一時半過ぎになりますと、右舷の前方に當つて、煤煙が見え出したから、何だらうと見て居りますと、それは赤く塗られた巡洋戦艦の比叡が、全速力を出して、公試運轉をして居る真最中で、艦首には物凄い程の水けぶりを立て、突進して來ました。

巡洋戦艦比叡

やがて比叡との距離が近くなりましたので、此方では登舷禮式で挨拶しました、すると右舷二百米突の近くを、此の大怪物は、二十七節の全速力で、反對の方面へ航走したので、其の大きな艦橋と、堂々たる威力とは、私達の日を眩ら

二十七節

★軍艦遠征航挿話

せずにはおきませんでした。

比叡は、

『何だい、あんな小さな艦で、あんな速力で、それで遠洋航海をするのか』

と、嘲り顔をして、大きな浪をたて、さつさと行き過ぎてしまひました。私

達は一萬噸足らずの艦で、僅か八節と云ふ原速力で、涯もない大海原へ乗り出し

たのであります。

八節

▲鳥つりの楽しみ

併し大洋上にも、時々面白い慰みがあります。海で魚を釣るのは當然ですが、

鳥釣りとは一寸珍しいでせう。

薄黒い大鳥

横須賀を出た翌々日のことでもあります。何所からともなく、一羽の薄黒い大

な鳥が、艦尾の方に現れました。或時は高く或時は低く、巧みに翼をふり動かし

て、悠々と私達の艦を追かけて來ます。別段美しい鳥でもなく、他に取り立て

ゝ云ふ程のよい鳥でもありませんが、何しろ大海の真中へやつて來たのですか

ら、皆の者の目が、此の一羽に集つたのも無理はありません。

はじめ此の鳥を見つけた時は、よい鳥だ、可愛い鳥だと、誰れもが喜んでみて居りましたが、やがてのことに、只見て居るばかりでは面白くないから、捕へてやり度いと思ふ様になりました。

その日は暮れて其のあくる日になりますと、昨日は一羽であつたのが、二羽になりました。親か子か、それとも友達か、二羽はさも仲よさうに、相變らず私達の艦の後から、ドン／＼ついて來るのです。

さアかうなると、是非共此の二羽の鳥を捕へて見ようと云ふ考へが、皆の人の頭に浮びます。そこで相談は忽ち一決して、三百米突ばかりの長い丈夫な糸を取り出し、その端に一片の肉を結びつけて流したのです。尤も此の肉の中には、銀色の鈎がかくされてあることは云ふまでもありません。

砲塔の蔭にかくれて、此の糸を持つて居る男は、十米突、二十米突と、だんだん長く延ばして、やがて鳥の飛んで居る邊にまで流しました。

二羽の鳥

「今にかゝるだらう、愉快だなア」

「あの馬鹿鳥め、今夜の御馳走になるとも知らないで……」

と、皆の人達は、もう釣り上げたものと定めて得意がつて居ります。

鳥は水の上に、うまさうな餌物を見つけて、幾度も翼をゆるめて、その傍へ接

近しましたが、まてしばし、どうも之はたゞの御馳走ではなさうだ、うつかり

食はうものなら、此方が食はれるかも知れない、けんのんくと、かう思つた

か、どうしても食ひつかうとは致しません。

艦は八節の速力で、悠々と走つて居ます。肉も八節の速力で、浮きつ沈みつ走

つて居ます。鳥も同じ速力でついて来ます。ついては来ますが、一向に食べよう

とは致しません。何だか今度は此方が馬鹿にされて居る様にも思はれます。

やがて三百米突の糸は、水にぬれて重くなつただけで、引き上げられました。

肉も其のままに附いて居ました。二羽の鳥は、失敬とも何とも云はずに、何所と

もなく姿をかくしてしまひました。鳥釣りはかうして、まんまと失敗に終りまし

鳥の智慧

信旗

たものゝ、併し私達は、こんな無邪氣の樂みのために、とれだけ航海の淋しみを
を忘れたかも知れなかつたのです。

▲手紙の交換

我が艦隊淺間と吾妻とは、前になり後になり、右になり左になり、お互に顔こ
そ見合せて廣い海の上を歩いて居りますものゝ、水と云ふものに距てられて、何
かと不便のことも多いのです。勿論信號旗と云ふものがあり、殊に手旗など、云
ふ、此の上もない重寶なものもあります。實際はまだ、それだけで物足りな
い事が澤山あります。

そこで二週間以上も續くやうな、長い航海になりますと、其の途中に於て、手
紙の交換を行ふ必要が起つて来ます。海上波立たず、平穩無事の場合には、救助
艇を仰して、交換の用は足りるのですが、もしも海が荒れて居る時か、又は簡便
に其の事を行はうとする場合には、どうしても別の手段をとらねばなりません。

さて此の手紙の交換、それを行ふのは大抵軍事點檢(午後五時十五分)後であ

救助艇

ります。その三十分か一時間前に、取次の者が、

「交換の文書はありませんか」

と云つて、各室を廻つて歩きます。そしていろいろの文書の類が、上甲板に持ち出されますと、それを一纏めにして、嚴重に防水して樽の中へ入れ、水の浸入しないやうに密封した上で、之に浮標をつけて、長い丈夫な綱の端に縛ります。

さて時間になりますと、二番艦はどん／＼其の距離をつめて、やがて二百米突に近づいて來ます。かくと見た一番艦は、艦尾から件の樽を、浮標もろともに、海中に投げ込みます。

バツと白い飛沫が飛び散つて、樽は波の上に漂ひますが、それには長い綱がついて居て、だん／＼延びながら、次第に二番艦の舷側に近づきます。すると二番艦では、かねて用意して置いた、端に鈎のついた太い綱を、艦首からスル／＼下して、獲物御座なれと云はぬばかりに、樽を目がけて打ち込みますと、狙ひ違はず、鈎は見事に綱に引ツかゝつて、樽はスル／＼と、二番艦の甲板に引き上げ

られます。

二番艦ではかうして、引き上げた樽に、又新しく文書を入れて、再び海中に投げ込みますので、一番艦ではソレツと云つて、ウンウン綱を引ツ張つて、苦もななく引き上げてしまひ、樽を開いて二番艦からの面白い通信を読むことが出来るのです。

こんなことは、陸上にはかり居る人は、何の趣味も感じますまいが、實際長い航海の時には、又と得難い樂みの一つであります。(津間一士官談)

四 軍艦香取拜觀記

海軍思想養成の目的のために、親しく帝國軍艦の模様を見て、それを世間の少年諸子に紹介したいとは、私の永年の希望でありました。所が幸ひにも今度、香取の村上機關中佐から招かれて、同艦を横須賀工廠の陸岸に訪問したのであります。

横須賀の停車場を出て、逸見の埠頭から汽艇に乗りますと、約十分を出でない間に、香取の繫留所に到着します。折から五月半の新暑の氣鋭く艦腹を射て、一入の雄大さを感じました。

一體此の香取と云ふ艦は、日露戦争中に出来上つただけでありまして、三笠や朝日などに比較すれば、排水量も實馬力も、餘程優れて居るばかりでなく、艦内の設備に於ても、改良された點が少くないとききました。

機關 長村上莞爾中佐は、私のために艦内を隅から隅まで案内して、深切に説明して下され、また副長の眞田中佐にも御面會して、いろいろ有益な話を承はることの出来たのは、私の最も愉快とする所で、改めて先づ兩中佐に御禮を申さねばなりません。

さて前記の如く香取は、戦後の補充費で出来たもので、其の製造所は英吉利のグキツカース、ソンス、エンド、マキシムで、三笠もこゝで出来、金剛も同じ所が出来ました。

同艦の長さは、七十六間三尺九寸、幅十三間二尺九寸、吃水二十七尺、排水量一萬五千八百四十八噸、實馬力一萬六千三百二十馬力、速力二十節、積炭量一千八百五十七噸、たゞこれだけ聞いただけでも、私共は吃驚してしまひます。

何しろ大きな艦ですから、其の乗員の如きも、准士官以上七十九名、下士官八百三十七名、合計九百十六名、また其の搭載の大砲は、四十五口径式十二吋砲四門を主砲とし、同十吋四門の副砲と、他に六吋砲十二門、三吋砲十六門、三吋砲三門、即ち大砲の數が總計三十九門であります。

尤も諸君は、たゞ之だけ聞いたのでは、別に感心もしないでせうが、砲身の價を聞いたなら、吃驚させよう。即ち十二吋砲一門で、十萬二千二百八十五圓、十吋砲が七萬〇八百四十七圓、六吋が一萬七千四百圓かゝると云ふことです。

また此の大砲から打ち出す彈丸の量は、十二吋が百貫九百六十匁、十吋が六十二貫六百匁、六吋が十二貫〇九十匁で、之が一發の代價は、十二吋千五百十九圓、十吋五百五十四圓、六吋八十六圓で、つまり主砲四門を、一時にズドン

と發射すれば、四千六百三十六圓の金が、飛び散る勘定でありますから、我が海軍が自重して容易に發砲せずいよゝ敵艦が射撃距離に入るを待つて、はじめに發砲しますのも、或は砲彈の貴重を思ふからのことでありませう。

斯くの如くに重く、斯くの如く高い所の砲彈は、果してどこまで達するでせうか、之を聞くと又驚くばかりの偉力がありますので、即ち十二吋砲の最大射撃距離は五里三町に至り、十吋砲は四里十八町、六吋のが二里二町にまで達します。

私の拜觀した香取には、これ等の有力なる大砲の外に、水雷發射管が十八吋徑五門と、探海燈も六基まで備へつてあります。私が上甲板を歩いて居た時に、丁度十吋砲の修繕をして居ましたが、長大なる十吋の砲身は、厚い鋼鐵で圍まれた砲臺諸共に、ゆるゝ廻りますので、私は試みに、

『何所で誰れが動かしてゐるのでせう。』
と質問しますと、機關長の答に、

『此の砲臺や砲身が動くのは、全く水壓の力なので、すつと下の方から廻つて居

五里三町

食物調理

冷氣サーモ
タンク

ます。』

と云はれました。成るほど中甲板でも下甲板でも同じ速力で、砲臺の掩蓋物が動いて居ました。

私が中甲板へ来て驚いたことは、下士卒の食物を調理する所で、約一斗の米が、四十分足らずで飯になります、それも火力を用ゐないで、専ら蒸氣力に由ると聞きました。冷氣サーモタンクの設備なども、日本の軍艦では、此の香取がはじめだと教へられました。

此の冷氣サーモタンクと云ふのは、軍艦が熱帯地方へ行つた時には、彈藥庫其他必要の場所へ、冷い空氣を送らねばなりません、それをば此の新式の器械で、ドンク製造して、艦内に入る所へ分配しますので、冬の寒い時には、之と反對に熱した空氣を送るやうになつて居ます。

かくて艦長の公室や寢室の側を通つて居りますと機關長の注意がありましたから、何かと思つてみますと、之は彈藥庫の溫度を、自鳴するといふ不思議な器械

で、軍艦に於ては、弾薬庫の温度を、或一定の度にして置くことが、最も大切な条件で、もし少しでも高低が出来ますと、此の器械が自鳴して、警報するやうになつて居ます。

平生は無用ですから、必切りになつて居ますが、戦時には最も必要な、戦時治療室の設備をも、特に見せて貰ひました。戦傷者を運搬する器具や、消毒器の配置なども、用意周到で、たい驚くばかりです。

下甲板から機關室の薄暗い所まで行つた時、私はそこに働いて居る人達の、苦勞を思はぬ譯には参りませんでした。上も下も太い鐵の格子になつて、油でツルツルになるのです。私は布片で手をふきく再び元の上甲板に戻り、士官公室でコーヒーをのんで、はじめてホッと一息しました。私を乗せた水雷艇は、やがて香取の舷側をはなれて、水ヶ浦へと向つたのです。

五 横須賀軍港一週記

軍艦香取の艦載水雷艇に送られて、無事水ヶ浦の埠頭に上陸した私は、直に港務部長森義臣大佐をお訪ねしました。森大佐はお忙しい中を快よく御面會下されて、一應來意を問はれた上、わざわざ私のために、小蒸汽の用意をして下さいました。

尤も軍港のことは、極めて嚴重に取り締つてありますから、ノートを携へたり、鉛筆を持つたりすることは、全くゆるされません。で私はたい自分の目に映つた感じだけを、こゝに記して見たいと思ひます。

港務部の汽艇は、愉快な軽いひきを立て、静かな港内の波を蹴つて進んで居ます。前面の海軍工廠の陸岸には、音羽、出雲、及び香取が、悠然として浮び出で、少し距つてド級艦の攝津が、其の大きな體を、ドックに入れ、マストには出羽司令長官の大將旗が、初夏の朝風に、さも心地よく、ヒラ／＼と翻つて居ます。

またそれと反對の方面には、近頃遠洋航海から歸つたばかりの、吾妻と宗谷と

軍艦壹岐

海防艦

山海風

が繫留されて居ますが、吾妻は舞鶴鎮守府の艦だから、近日彼の地に歸るので、今其の仕度をして居るのだと聞きました。

更に此の宗谷の隣りには、壹岐が居ます。今は海兵團の練習艦となつて、見るも哀れな姿ですが、此の艦のむかしを思ふと、實際氣の毒にもなるのです。

壹岐は其の舊名をイムペラートル、ニコライ一世と呼ばれて、露國の太平洋第二艦隊に屬し、かの日本海海戦には、司令官ネボカトフ少將の旗艦として、勇戦方闘の上、力全くつきて、我が軍門に降伏しましたので、それより約十年ばかりは、一等海防艦として、我が海軍の役務に服して居りました。

しかし壹岐はもう年とつて、むかしの力がなくなりましたので、この様に海兵團の沿岸に繋がれて、新兵の練習用に供せられて居ります。英雄の末路も亦あはれではありませんか。

汽艇は先へくと進みました。すると日本第一の大型驅逐艦たる海風、山風の姉妹艦が、其の細長い體を陸岸に近く横たへて、命令を待つかの如く、煙突から

は物凄いやうな黒煙を吐いて居ます。その傍を日清戦争時代に名高かつた小鷹號が、ボーツと低い汽笛を鳴らして、軽く波を立て、通過しました。小鷹號と云へば、疾くのむかしに廢艇になつて、今では専ら練習用に供せられ、恰も前時代の遺物の如くに、動いて居るのです。

こゝに五月十二日から開始せられた、本鎮守府所屬の基本教育演習に参加した各艦艇は、此の日午後四時頃から、續々港内に歸航しますので、艇隊司令官東伏見宮殿下の旗艦筑波は、橋頭高く少將旗を掲げ、沖の方より黒煙を吐きつゝ、數隻の僚艦を伴うて、悠々として進航して居ます。

聞く所によれば、此の度の演習に、東伏見宮殿下は、旗艦筑波に御坐乗、橋立、高千穂の僚艦、及び驅逐艦水雷隊の一部を率ゐて、遠く駿河灣に出動し、それより攻撃に對する豫定の行動を開始されましたので、防備隊司令官としての西尾大佐も亦之に隨はれたのであります。

所が一方の水雷戦隊司令官上泉少將は、旗艦八雲に坐乗し、相摸以下驅逐艦

旗艦八雲

旗艦筑波

如月、初霜、神風、響、及び十一隻の水雷艇を以て、防禦の任に當り、十二日から十三日にかけては、攻防兩軍とも、専ら索敵行動を執り、十三日の未明からはじめて砲火の間に見ゆることとなりました。

すると丁度其の口は、猛烈なる風雨のために、兩軍共に少なからず其の行動を妨げられ、殊に暗夜の強風と、猛浪との勢ひはげしく、多くの水雷艇は、木の葉の如くに浮沈して、十分に働くことも出来ませんので、一時防禦軍の方は、餘儀なく房州館山沖に避難するの外なかつたと云ふことです。

さる程に一方の、侵入軍は、此の暴風大雨を衝いて、遂に東京灣口を衝くべき勇氣を示しましたので、例の大型驅逐艦海風、山風をはじめ、有明、彌生、吹雪の各艦は、暗夜を利用して之を撃退するの方針を取つたに拘らず、風や浪は少しも衰へる模様なく、到底侵入軍に接近することが出来ませんので、極力探海燈を以て警戒してゐるうちに十四日の未明になりまして、漸く戦闘中止の命令が發せられ、各艦相ついで、勇しく歸航の途に就いたのであります。

戦闘中止

一體今度の基本教育演習は、自然の偉力を敵として、苦戦を繼續したのであります。かく賑々しく港内へ歸つて來るのを見た私は、思はず愉快々々と叫びながら、なせ自分は海軍軍人にならなかつたのであらうかと、吾とわが心を疑ふばかりでありました。

かくて筑波も、相摸も、橋立も、皆豫定の錨地に著きました。平生ならば其の繋留作業の如きも、港内に居る艦が手傳ふのなさうであります。今は猶演習中ですから、各艦共にボートを下して、一所懸命に働いて居ます。

さて私は心靜かに、今日の前に浮んでる三つの艦を比較してみました。即ち筑波は日露戦後に出來た一種の巡洋戦艦で、艦型も新式で、速力も戦鬪力も強大、また相摸は舊名をベレスウエットと云つて、日露戦争の際には、露國東洋艦隊中の巨艦、橋立は日清戦争の頃には、有力な艦であつて、一時は聯合艦隊の旗艦にまでなりましたが、今では舊式の小艦、やがては役目をすまして、廢艦になるものに相違ありません。

三艦比較

沖の方からは、猶續々として、驅逐艦や水雷艇などが、ドン／＼歸つて参ります。併し私はそれ等の艦を一々待つてゐることは出来ませんから、汽艇の針路を變じて、巨艦比叡の居る小海の方へ行きました。

巡洋戦艦比叡は、やがて日本海軍に出来る八四艦隊のうちに加はる二萬七千噸の大艦で、それがこゝで橋を立てたり、煙突を装つたりされてあります。思へば去年の十一月、此の艦が此の工廠で、大元帥陛下の御親臨の下に、恙なき進水の式を挙げた時、草莽の微臣たる私も、陛下の玉座近くで、拜觀するの光榮を得ましたが、これより半年過ぎて、再びなつかしい其の比叡に逢ふことが出来たのは、しばらく別れて居た親友に逢ふ心地して、云ひ知れぬ愉快を覺えたのであります。

進水當時の比叡は、私達の如き素人の目には、只長大なる函を見るやうで、これでも軍艦かと疑はれた位であります。今日来てみますれば、既に上甲板の取りつけ作業も、著るしく進んで、大分軍艦らしくなつて居ます。

進水式

起重機

渡漈船

殊に艦體に接続せる大起重機の如きは、世界有数のもので、やがて据ゑつけられる十四吋巨砲の如きも、此の機械によつて、やすやす運ばれるのだと聞いては、日本海軍の進歩を、祝賀せずには居られません。

「さア今度は渡漈船の居る方へやつて呉れ」と、案内の下士官は、水夫に命を下しましたので、汽艇は再び勇しく波を蹴つて、比叡の傍を遠ざかつてしまひました。先に沖の方に見えて居た軍艦は、餘程近くなつて居ます。私の乗つて居る汽艇は、筑波や相摸の艦側を、矢の如くに走つて、渡漈船の方へ赴かうとします。港内の水靜かに、只スクリューの回轉を聞くばかりです。

やがて凄じいひびきが、私の耳を打ちました。何かと思つて其の方を見ますと、大きな空車が、數十尺の上で、クル／＼廻りますと、それに取りつけてある泥掬ひが、續々海中を出て、一方の大きな船の中へ、掬つた物を棄てるひびきで、あまりの騒々しさに、人の話し聲も耳へは入りません。

深底の泥

見ると此の泥掬ひには、一抱へもあらうと思はれる、大きな石が入つて居ます。作業者はその回轉して居る間に、鶴嘴を振つて碎いて居ます。勿論數十尺の深底から運ばれて來るのですから、石の色も變つて居ります。かくて私の乗艇は、再び港務部の埠頭へ安著しました。(五月十四日横須賀にて)

六 海軍参考館を見る

東京築地五丁目の、海軍大學校の構内に、巍然たる建物が、空を摩して立つて居ます。櫻の並木に圍まれた、赤い煉瓦造の、しかも其の周囲には、種々の大砲、敷設水雷、水雷發射管などが、それぞれ分類されて、雨露のさらすに委せてあります。赤い花の苜蓿が、一面に咲き亂れて居ます。時は七月の二十三日、海軍大學校に、八代校長をおたづねした序に、同校長の管理に屬する、参考館の方をも見せて貰ひました。

博物館や遊就館が、世間一般の人々に知られて居る割合に、参考館の方は、ま

公開日

だあまり知られず、一般の人がこゝに足を向けないのは、蓋し此の館が毎日公開するのでなく、只日曜と祭日にはかり、公開することゝなつて居るからでもあります。

館内はさまで廣くはありませんが、其の陳列品の悉くが、殆ど他では見られない物ばかりで素人の目には、只もう驚くの外ありません。私の如き専門の知識のない者が、かれこれ説明するのは、身の程知らずと思はれるかも知れませんが、今は一通り見ただけのことを記して見ませう。

本館の階下室の中央部には、主として各種の大砲が陳列してあります。舊軍艦『東』に据ゑつけてあつたと云ふ、恐しく太いそして比較的短い大砲と、日露戦争の記念の軍艦撃手の主砲に、丁度蜂の巢の如く一面に孔のあいてゐるのや、某艦(わざと名を秘して置きます)の十二吋砲が、敵砲弾のために、燃ちちぎつた如くに、折れ損じて居るのや、軍艦松島の十二珊砲が、毀損してくの字形になつたのなどは誰れが目にも第一にそれと氣がつくであります。

東の大砲

★海軍参考館を見る

旅順の大模

また旅順要塞の模型も二個ありますが、二〇三高地と、乃木ステツセル 兩將會見の場たる水師營には、特に國旗を掲げて、其の地點を示し、港内沈没の艦船、或は我が閉塞隊の各汽船が、橋だけを水面に出して、悲惨な沈没状態を示す有様など、一々實地を見る如く、此の大模型に對しますれば、恰も旅順口上に飛行機を飛ばして、空中から見下すよりも、猶明かなものであります。

見上げる壁間には、當時の戦死將校が、油繪ではありますが、嚴然として私等を見下して居ます。一種云ふべからざる敬虔の念が、自然に湧き出して、此の忠死の眞影に對して、襟を正さずには居られません。

東郷大將の
大將旗

さて本館の樓上で、先づ見るべきものは、日本海海戦の際に、東郷司令長官が、旗艦三笠の檣頭高く掲げられた大將旗であります。砲煙に煤けて、かつ所破れて居るのは、恐らく敵弾の破片の爲であります。

あゝ偉大なる大將旗よ、此の旗が初夏の海風に翻つた時、全艦隊の將士等は、如何に振ひ起つたことでありませう。未だ戦はぬ前に、既に早くも敵艦隊を威壓

したに相違ありません。

海軍畫家として、日本獨歩の稱ある東條鉦太郎氏が、海戦の實況を寫した油畫の大額面が、都合三枚掲げられてありますが、其の中で最も壯快を感ずるのは、我が驅逐艦連が、敵のステレグシチーを捕獲して、我が軍艦旗を掲揚しつゝある所で、逆巻く怒濤を冒し、敵の十字砲火の中に、我が驅逐艦の勇敢なる行動を見ては、どうしても晝であるとは思はれません。東條畫伯が入神の筆致は、全く感服の外ないのであります。

又日清戦争の折りの、海戦をしのぶべき一室がありますが、こゝで第一に目に止まるのは、かの威海衛の總攻撃の時に、我が聯合艦隊の水雷艇隊が、暗夜風雷を冒して、敵の定遠、鎮遠、來遠、威遠などを襲撃した時に、矢つぎ早に發射した魚形水雷の、破損したままのものが、夥しく陳列してありますが、これを見ますと、何れも薄紙を丸めたり、或は引き裂いた如くになつて居て、どうしても金屬製のものとは考へられませんか。そして之等の破損したのや破片の類は、何れ

破損せる魚
形水雷

★海軍参考館を見る

も戦後に定遠などの艦底から引き上げたものであります。

顧みて樓上の一角を仰げば、そこには東郷大將の油畫の肖像が掲げられてあります。此の像は大將が先年英國皇帝の戴冠式に、東伏見宮殿下の隨員として渡英せられた時、彼の地の名手フイリツプ、アレキシウス、ラスズローと云ふ人に描かせたもので、その額縁に用ゐられた木は、優に三百年を経て居ると申します。

また軍艦の模型も少くありません。古い所では東艦、近くは新式巡洋戦艦の筑波、或は香取の進水式、さては回航中に不幸にも行方不明になつた敵傍など、何れも實物と少しの相違もなく、見事に造られてありますから、一度此の室に立てば、明治初年以來の、各軍艦の根據地に居る様な心地が致します。

次に各國水兵の等身大の模型も亦、少年諸子の見逃すべからざるもので、我が國の海軍々人の服装、或は維新前の、それまでが残らず陳列されてあります。之等の人形は、物こそ云ひませんが、何れもが當代の名人の手に成つたものだけ

に、其の面貌は生けるが如く、水兵は命令をまつが如く、士官は劍を握つて敵艦を睨んで居る様子、見るべきものは、猶此の外にそれはく澤山あります。最初八代校長は、十分に見ようと思へば、半日はどうしてもかゝると云はれましたが、私は時間の都合上一時間足らずで、さつさと素通りをしてしまひましたから十分のことを諸君にお傳へすることの出来ぬのを、甚だ残念に思ひます。どうか諸君よい機会がおありでしたら、是非行つて御覽なさい、意外な新らしい學問が出来ます。

七 旅順の戦跡を弔ふ記

日露戦争のその中でも、旅順の包圍戦は、最も悲惨なものでありました。それは他の方面の戦鬪が、何れも野戦であつたのに反して、獨り旅順の背面攻撃ばかりは、永久築城の要塞に對して、全く正面の戦争をしたことよて、攻める者は甚だ不利益の位置に立ち、毎戦夥しい損害を被るばかりでありました。

その當時、要塞戦のわけを十分に承知しなかつた日本内地の人のうちには、其の陥落の容易ならぬをみて、暗に乃木司令官の技倆をかれこれ申しましたが、しかも要塞攻撃の、一朝一夕では、成功するものでないと云ふことが、明かに判つてみますと、誰れも注意を拂つて、攻圍軍に對し、多大の同情と敬意とを捧げたのであります。

現にかく云ふ私も、旅順の攻圍戦に關しては、絶す新聞紙上に現はれる些細な記事でも見逃すことなく、熱心に精讀しましたもので、其の開城の號外を手にした時の如きは、あまりの嬉しさに、手の舞ひ足の踊るを知らなかつたと同時に、心から第三軍の將士等の勇氣と忍耐とを感謝したのであります。

それより十年、もし機會があつたならば、一度は足を旅順の戦跡に投じて、親しく當年慘鼻の巷に、彼我の戦士の靈魂を弔ひたいものだ、と、望んで止まなかつたのですが、其の望みは端なくも達せられて、大正三年の一月半に、北風を正面に受けた要塞一帯の戦跡を、限なく巡り歩いて、思ふままに涙をこぼしたのであ

慘鼻の巷

ります。

これより先支那吳淞の沖合を抜錨した我が練習艦隊は、一直線に北航して、黄海の濁浪を蹴破ること前後四日、四面茫茫として、只遙かに一時山東岬角の、鋸の如き連山を望んだばかり。寒い潮風に吹きさらされつつ、艦橋甲板に軍事點檢に立ち、苦しい幾多の經驗を得て、四日目の早朝、はやくも入港用意の聲に驚いて、急いで上甲板にかけ上つて見ますと、嬉しや艦は、旅順老虎尾に近く、やゝ速力を弱めながら、港口を左舷に見て、黄金山の低砲臺下に、錨を入れたのであります。

黄金山低砲臺

見よ彼方の空高く、白色の高塔の聳ゆるものは、白玉山上の表忠塔ではありませんか。雪に競へる老鐵山や、海に面して堅固の砲臺を築いた黄金山や、何れも皆わが二つの目に集り來つて、まだ其の地を踏まぬのに、早くも心は勇み立ちます。

音にきく渤海灣の浪は、頗る高く、投錨して後も猶がぶりつゝある本艦を辭し

渤海の高浪

て、私達は旅順に上陸するとて、直に小艇中の人となりしました。小艇は高浪に弄れて、一上一下、或は甲板が波に潜り、或ははげしく傾斜して、今にも覆没するのではないかと、海には慣れぬ身の悲しさ、時々膽を冷しましたが、漸く港内に入ると共に、こゝは又不思議や小波一つもなく、恰も池の如き海面に警備艦の秋津洲が只一隻、悠然として浮んで居るばかり、如何にも静かな景色です。私達は平賀淺間艦長、園田水雷長、向山大軍醫と共に、二臺の支那馬車を雇つて、旅順の水交社を出で、こゝに戦跡巡りの程に上りました。折から北の風ますく烈しく、名物の黄沙を飛ばして、旅順の新舊市街は、全く黄色になつてしまひさうです。

名物の黄沙

旅順の支那人は、よく日本語を解し、其の馬車はよく走ります。私達は先づ順序として、記念品陳列館へと向ひました。こゝは恰も白玉山の東北麓に當り、館前に架け渡した橋の欄干にも、砲車の車輪を用ゐ、門の代りとして巨大なる重砲の砲身を置くなど、すべて旅順戦役の記念品から出来て居りますので、見るか

らに意義あるものです。

また其の建物は、露國時代の、將校集會所でありましたとやら、さまざま廣くもありませんが、館内一面に、日露戦争戦死者の遺物、各砲臺の破壊當時の模型、兩軍將士の油畫肖像などが、所狭きまでに列べられて、當時の要塞戦に關する概念を得させるやうに出来て居ります。

殊に本館の天井には、見事に貫通した大弾痕が、二つまで残つて居りますが、聞けば之は戦争の初期に當つて、日本の軍艦中でも、最高角度を有する日進の、間接射撃によつて、かく凄しく破壊されたのであると云ふことです。

旅順の各砲臺への通路は、山の麓から中腹にかけて、悉く馬車で往來の出来るやうになつて居ります。そこで私達は市街を北に廻り、支那人の部落を過ぎて、第一に鶏冠山砲臺を訪うたのです。即ち此の砲臺へ行くのには、中腹から徒歩で、數十米突を攀ぢなければなりません。しかも地上一面には、石灰石の如き稜稜たる石塊が、堆くなつて居まして、一歩足を踏み誤つて倒れでもしようものな

日進の問接射撃

★旅順の戦跡を甲ふ記

ら、それこそ皮膚を破るか、骨を挫くか、何れにしても相當の負傷は免れることが出来ないのです。

私達は背に水筒と、行厨とを携へたばかりでさへ、此の急峻な坂路を攀ぢるのに、幾度も息をきらして、水筒の水の御厄介になりました。それを思ふと、重い武装に身を固めた當年の攻圍軍勇士等は、如何に苦しかつたでありませう。鐵火の雨に面を曝し、障害物に足を奪はれ、かくて自然の岩石を攀ぢて、砲臺の下に肉迫した一事は、どうしても人間業とは思はれません。

鷄冠山の砲臺は、殆ど根抵から轉覆して、全く其の原形を失ひ、巨大なる砲身が、壊れた土壁の間から、僅かばかり頭を出してゐるのもあれば、破壊した砲架が、舊態のまゝで轉覆してゐるものもあります。されば此のペトンの土壁を發いて見たら、更に兩軍幾多の忠死者の、無慙なる形骸を發見することが出来るだらうと思はれます。

東鷄冠山の北砲臺と云へば、あの戦争當時、最も世に知られた堡壘で、我が

鷄冠山の慘狀

コンドラチ
エーコ將軍

軍の苦戦は其の極に達し、敵の驍將コンドラチエーコ中將の戦死したのも、亦此の堡壘内の出来事でありました。北堡壘は其の頂上まで、馬車で行くことが出来ます。築城の規模に於きましても、前記の鷄冠山砲臺に比して、遙かに大きく且つ見事なものです。

巨大なる白壁の土壁が、無造作に轉覆して居る間を忍るゝ通過して、掩兵部の内面を窺ひますと、丁度寫眞などで見える歐洲中古の殿堂の如く、其のコンドラチエーコ將軍戦死の場所は、鐵より固い土壁が微塵に碎かれて、今も猶將軍の血痕が、其の土壁にくつゝいて居る如く、一道の凄氣身に浸み渡り、久しく立つて居るに忍びませんでした。

さて此の北砲臺の西、やや旅順市街に近く峙つて居る高地は、即ち有名なる望臺であります。はじめ我が攻圍軍は、まだ北砲臺などに著目する暇もなく、猛烈なる強襲を敢行して、一気に望臺を奪取しようと企てたので、此の要地さへ手に入れてしまへば、市街も港内も残らず一目に見渡されますから、其の後の作戦に

望臺

非常に好都合ですから、我が軍ではどんな價を拂つても、先づこゝを占領しようとの計畫であつたのです。

聞く所によりますと、第一回の總攻撃には、望臺障壁の一角を奪取したにも拘らず、四方八面から降り来る猛烈な砲火のために、折角望臺の一部にまで達した一隊も、遂に全滅するの外なかつたと申します。今や望臺の頂上には、敵の備砲が二門、長き砲身を北に向けて、當年の有様を物語つて居ますが、其の一門の如きは、砲口が缺損して、攻圍軍の重砲の威力の大なのを示して居ります。

望臺の眺望はその名の如くなく、宜しく、旅順背面の山河平野は、悉く見ることが出来ず。併し其の割合に市街や港灣の展望は完全ではないやうです。後に攻圍軍が、此の方面の攻撃を中止して、専ら二〇三高地の占領に全力を盡したのも、成る程と領かれます。

かくて私達一行は、望臺を下つて再び馬車に乗り、最も大規模の築城になれる二龍山と松樹山とを見學しました。此の二者は、何れも固い天然の岩石を利用

二龍山と松樹山

二龍山の咽喉部

し、塹壕の廣さも驚くばかり、之を奪取しようとするには、鬼神の威力を以てしても、猶及び難いと思はせます。私達は用意の行厨を開いて、二龍山の咽喉部なる磊々たる岩石に腰打ちかけました。亡國の子供等が、何所からともなく群り来て、鐐に附著いた残飯を争ふのも、場所柄として一人の淋しみを感ずるのであります。

松樹山を下つて、椅子山、案子山等の堡壘をば車上から眺め、更に長驅して二〇三高地へと向ひました。東鶏冠山から二龍山や松樹山一帯の諸砲臺の線は、殆ど隙間もなく相連接して居ますが、獨り二〇三高地ばかりは、全く別方面に特立して居りますから、馭者はしきりに馬の尻に鞭を加へて、奔らせましたが、それでも一時間以上かかりました。

馬車は右に曲り左に折れして、漸く山を下り、再び新市街に入つて、高壯なる各種の建物の間を通り抜け、更に支那人の部落を過ぎて、漸く高地の麓に達したので、私達はこゝで馬車を降り、海抜二〇三米突を攀づるのであります。

山は元よりさまで高くはありませんが、グル／＼廻りの路ですから、容易に其の頂上に達することが出来ないのです。そこで肩の水筒を傾けたり、ポケットの蜜柑をむいたりして、辛うじて一步一步進みました。

二〇三高地上の高塔は、巍然として旅順一帯の山河を睥睨するもの、如く、顧みて今来た方を眺めますと、山紫に水みどりに、白壁赤壁の大夏高樓は、甍を並べて立つて居りますが、而も人の往來はまことに稀であります。あゝ旅順の市街は、此の様に今は淋しいのでありますけれども、往年露國人の經營時代には、銀鞍白馬の武人も活歩し、紅衣金髪美人も遣ひ、東洋無雙の繁盛の土地であつたに相違ありません。

私達はこんな思ひをくり返しながら、いつとはなしに頂上の人となりました。石や土や、何者にか掻き亂し、掘り返されたもの、如く、乃木大將の所謂、鐵血山を覆へして山形の改つたものでありませうか。巨彈の命中した所は、今も

二〇三高地

猶大きな穴を残し、幾十條の電光形溝道は、依然として元のまゝに存して居ります。

高地の頂上に立つて、四方を見渡し、更に脚下を見つむる者は、誰れとて戦争の悲惨を思はぬ者がありませう。それより十年あまりの今日猶、石礫に交つて、白い骨が発見されますもの、あの當時の有様は、恐く鬼神も顔を掩うたに相違ありません。

けれども今日では、旅順背面の各山丘には、悉く松柏類を植ゑ込んで、其の成績も大さによろしいから、思ふに今より十年を待たないで、見ゆる限り美しい緑の山と變ることでありませう。

かくて私達は、夕日の影を背に負うて、山を下りました。爾靈山の高塔は、燦然たる光を放つて、私達を送つて居ました。私は何となく此の地を去るに忍びませんでした。歸艦して後に、前艦橋に立つて見ますと、老鐵山の彼方に、漸く暮の色が迫り、右舷近く露人の別荘が、夢の如くに立ち並んで居ます。併しそ

老鐵山

無人境

れも只一棟だけが、當鎮守府司令長官の使用に供せられて居るばかりで、他の數十棟は、何れも雨にぬれ、風にさらされて、立ちながら腐れるのに委せてある有様。

されば海上から眺め見渡す旅順口は、恰も無人境の如くに淋しく、徒らに渤海の高浪が、滔々として舷側を襲ふのと、寒いく、北風が、五體を凍らせねば止まぬと、競うて吹き来るばかり。天には星高く、地には老虎尾の燈臺がたゞ一つ燦爛たる光を放ち、旅順港外の夜は更けました。

八 海上の初日出

いつ見ても、氣のはれぐするの日は、日の出の景色であります。しかも其の日の出も、新年第一日の、世にいふ初日の出に於て、一層の美觀と、崇嚴の趣とを味ふことが出来るのです。

私はいつも必ず年頭に早く起きて、上野の臺に寒い風に吹かれ、白い霜を踏み

海上の日の出

支那大陸

ながら、東の空からさしのぼる大御ひかりを拜するのを、何よりの樂みとし、希望とし、そして年首の佳例として居りました。

所がかねて海上生活を續けて居る人達から、大洋上に於ける、初日の出の美觀を聞かされてからと云ふものは、いつか自分も好機會を得て、陸地でみる初日の出よりも、更に雄大に、更に崇嚴なる、洋上の初日の出に接したいものだ、殆どそれこそ夢の間も、忘れ得なかつたのですが、今度いよいよそのよい機會にめぐり會ひました。

名にし負ふ渤海灣の浪は、滄浴として巨艦の舷側に打ちよせては、潔く碎けて居ます。我が艦は今や半速の微力によつて、黄金山下の錨地に著かうとして居ます。時は某年某月の曙、明くれば新玉の春と云ふのに、さても何とて、かくは寒氣の猛烈なことでありませう。

昨日の朝、左舷の正横に、支那大陸の山影を、チラリと眺めて以來と云ふもの、陸地を見ぬこと正に一晝夜、しかも刻々北に進めば進む程、寒氣の烈しいた

★海上の初日出

速力記號

めに、靴下までも二枚を重ねて、私は今吊床の夢から覺めて、上甲板へと足を運んだのであります。

マストに掲ぐる速力記號は、明かに半速を示して居ります。浪はなかく高いけれども、艦體の動搖はそれ程でもありません。北の烈風を受けて、條索の鳴りひやく聲は、さながら遠雷の如く、満天星斗闌干として、海は猶た一面に暗く、底に潛む幽鬼の聲の、何所からか傳はる程に物凄い光景を呈して居ります。航海者が、大洋上に在つて、唯一の力とたのむのは、燈臺の光であります。魔の領海ではあるまいかと疑はれる渤海灣のたゞ中にある我艦に對して、老虎尾半島の燈臺は、絶えず燦爛たる光を送つて居ますから、さすがの海の魔も、之がためには、怖れ伏してしまひませう。

入港用意

さても恙なき航海を経て、模糊たる霧の中に、天を突くばかりの、黄金山の山の影が、見えつかくれつする時に、前部の艦橋上から、入港用意のいかめしい令は傳はりました。私は寒い風に全身を吹かれながら、依然として上甲板に立ちつ

防寒設備

くし、どうしても比較的温い室内に入らうとは思ひませんでした。それと云ふのも今朝こそは、多年の間夢にも忘れ得ぬ、海上の初日の出を見たいばかりであります。

艦内の備砲其の他、重要な金屬類には、残らず防寒の設備が施されてあります。もしも此の設備をしなかつたなら、如何な金屬類でも、氷點下何度といふ、酷寒の場所に耐へられないからです。私は生れ落ちてから、まだ今朝ほどに寒い思ひをしたことがありません。假りに之が自分の家でしたら、初日の出を見ようなどと、思ひもよらぬ事、障子も襖もめ切つて、火鉢に嚙りついても居ましたらうが、死を覺期して家を出た今度の旅だけに、よしや凍るばかりの甲板上に立ち盡しても、苦しいの辛いとは、さら／＼思ひ及ばなかつたのです。

大海の霧

見渡す限り、まだ曉の霧が深く立ち罩めて居ます。オ、大海の霧！これは經驗のない人達に語つたとて、一向に信用もされずまいが、航海者にとつて、霧ほど怖いものはありません。浪よりも風よりも、霧ほどの苦しみはないと云ひ

上村艦隊の
無念

ます。

船と船とが、衝突をして、思はぬ所で沈没のうき目を見るのは、全く此の霧のためで、日露戦争の頃に、山東沖で春日が吉野の艦腹を突き破つて、とう／＼あのみごたらしい最期を遂げさせたのも霧、上村艦隊が幾度も幾度も敵艦隊を取り逃がして、無念の齒を噛ひしはつたのも亦霧のためではありませんか。

しかし今朝は、既に錨地に著いて居るのですから、よしや多少の霧が有りましたも、更に意とするには足りませんが、私の楽しんで待つて居た初日の出の光景が、果して完全に拜まれるでせうか。固よりこれは、自分一人の望みではありませんが、若しも此の霧のために、完全に拜むことが出来ませんでしたら、それこそ千載一遇の好機を、空しく水の泡と消えさせることゝなります。

腕に巻きつけた時計の針は、次第々々に進みますが、東の空はまだ明るくなりさうもありません。併し大海一面を閉して居た霧は、著しく薄れて來ました。褐色の旅順の山々、白玉山の表忠塔、黄金山の砲臺、老鐵山の雄姿などが、だんだ

んに目の前に見え出しました。そして私達の軍艦は今、黄金山の低砲臺下に居ることが解りました。

私の傍に立つて居る一將校は、旅順の海戦に従事した勇士であります。私のために、あの山、此の山を指し示しながら、その當時の壯烈なる海戦の有様を、何くれとなく、話し聞かせて呉れました、そしてその時分は、今現に私の居る艦のある近傍には、天の星よりも、もつと／＼多くの機械水雷が、一面に散布されてあつて、逆も／＼ツカ／＼進むことが出来なかつたと云ふやうなことも話して居りました。

それを聞いて、私は何となく氣味悪く思ひました。けれどもそれは十年も前の古い話ですよ、今更そんな危険物が、こゝらにマゴマゴして居る道理はあうません。もしもあつたら一大奇蹟と云はねばなりませんまいと、其の將校は笑ひました。

甲板の掃除をする海水が、見る／＼その儘に凍りついて、思ふやうに流れませ

機械水雷

甲板上の氷

ん。東京の市中でも、大道にまいた水が、直に氷に變ずることは、嚴寒の頃には、常にあり勝ちであります。併しそれは少くとも、まいてから五分なり十分なりたつて後のこととあります。けれどもこゝでは見る間に白い厚い氷になつて、キラ／＼光るのであります。其の變化の早さは、驚くの外ないのです。

尤も水兵はよく寒氣にならされて居ますので、こんな場合にも、格別寒さうな顔もせず、平氣で甲板の掃除を致します。ズボンも膝頭までまくり上げて、例の如く素足のまゝで、せつせと働いて居ます。無論副長も其の他の士官も、殊に甲板士官は、一層此の場合に骨が折れます。

なまげもの

私はさう云ふ苦しい辛い仕事も見て居ました。そして自分は何となく、なまげものやうに考へられて、他の人達の手前にも、甚だ面目なく思ひました。朝起きて湯で顔を洗つたり、或を直に火鉢に手をかざす人達を、此の時から非常に憎らしく思ふやうになつたのでした。

かくて時計がだん／＼進行して、東京ならばもう雑煮を祝ふ頃になりました。

海上の霞

最前心配して居た霧は、もうすつかり晴れてしまひました。そして其の代りには、春らしい長閑な霞が、海の彼方に朧いて居ます。東はいつの間にか白み渡つて、赤いひかりが、殘雲の間にチラ／＼と微かに動くのが見えます。

さては待ち設けて居た初日の出がのぼるのかと、私はもう嬉しくて／＼たまりません。ふり返つてみれば、老虎尾の燈臺が、いつの間にやら其の火を消して、たゞ高い其の姿が、あり／＼と私の目に映るのであります。

すると東の空の雲の間から、赤銅色をした一大圓盤が、ヌツと顔を出しかけました。雲は湧き返るばかりの色を帯び、俄かに夢から覺めたやう、又廣い海も其の面に、金や銀の波を漲らせました。初日の出だ！ 初日の出だ！ あゝ何と云ふ崇高な光景であります。

一鳥鳴かず、一鳥飛ばず、如何にも靜かに、如何にも嚴かに、たゞ渤海名物の長濤が、暫くの間も休まないで、艦體をゆらくと動かすのであります。

私は何かしらす有り難くなつて、思はずも掌を合せました。むかし安倍仲麿

安倍仲麿

が、唐國にあつて、さしのぼる明月を見て、その故郷の三笠山を思つた如く、私
 も今朝の初日の出を見て、故郷のことを思はぬ譯には参りませんでした。
 今現在私の拜んで居る初日の光りは、東京に居る私の家族も、友人も、同じ
 く初日の出として拜んで居りませう。彼等の幸福なる如くに、私も今幸福なる世
 界に、安心して新年を迎へたことを、先づ天に向つて感謝しなければなりません。

天皇陛下萬歲!!

大日本帝國萬歲!!

海上生活 完

大正六年九月二十日印刷
 大正六年九月廿五日發行

科外教育叢書 卷三
 海上生活 附



科外教育叢書刊行會編輯部編纂
 東京市神田區錦町三丁目十七番地
 大葉久吉
 右代表者
 並發行者
 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
 青柳十郎
 印刷者
 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
 株式會社 秀英舎第一工場
 印刷所

發行所

東京市神田區錦町三丁目
 振替東京六三三八四番
 大阪市西區靱下通二丁目
 振替大阪一八四五九番

科外教育叢書刊行會
 科外教育叢書刊行會支部

目書行刊近最

分回參第

◆◆◆◆◆
 楠ケ現内天
 木一 代外 文
 正ザ 書教 と
 成ル 翰訓 地
 文物 語
 ル範 文

分回貳第

◆◆◆◆◆
 古化國俗志
 今學語 理蜜柑箱の
 名工業要現の
 文の 語說象机
 集話

分回壹第

◆◆◆◆◆
 日博世史國
 本物界 趣功
 の界の 味名
 のの 風讀物
 精現 俗本語
 華象

分回六第

◆ 格言俚諺辭典

分回五第

◆◆◆◆◆
 海世現瑞内
 上界代西外
 生發女の逸話
 活明文義文庫
 談範民

分回四第

◆◆◆◆◆
 國日内作魯
 民用外 文鷹雄と海老太郎
 年法律名新資料
 中行願婦傳
 事問傳料

◆ 以下每月五冊發

355
84

8.8. 1

終

